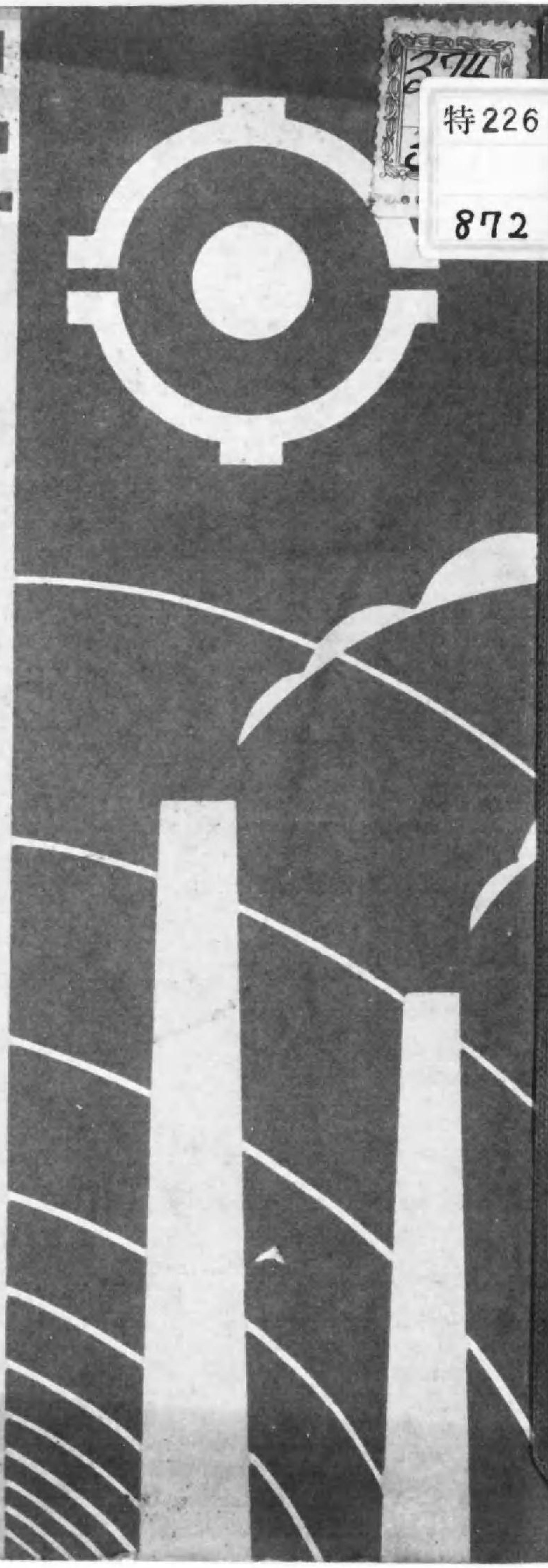
今治
鄉土讀本



特226
872

始

今治

鄉土讀本

愛媛縣教育會今治部會

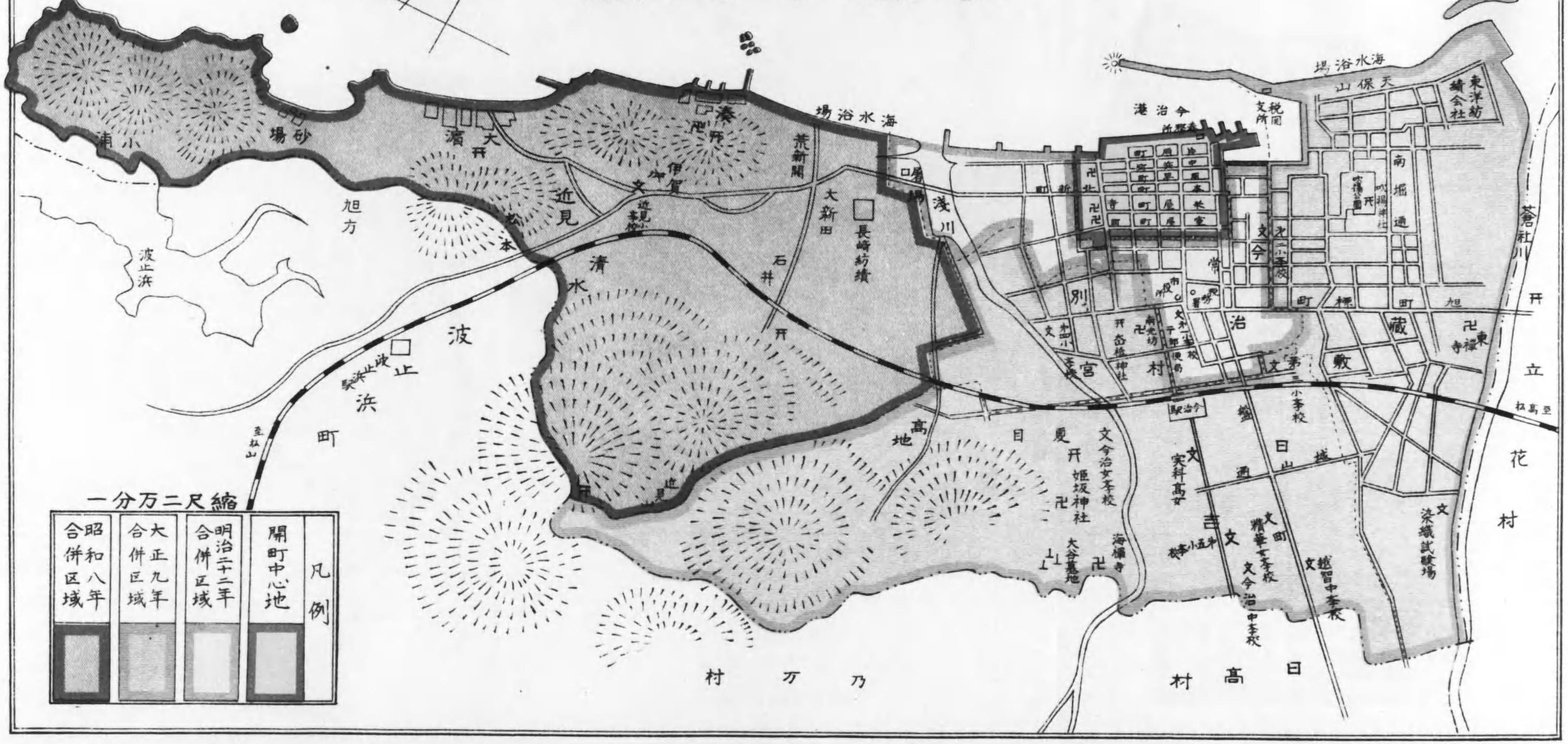
特226
872

郷土讀本目次

今治市鳥瞰寫眞
今治市地圖
例言
一 東宮行啓……一
二 今治市……四
三 今治城を聽く……一〇
四 藤堂高虎……一六
五 東禪寺藥師堂……二一
六 市役所……二五
七 敎育……二八
九 堀牡蠣……三四
一〇 郷土の氣候……三六
一一 近見山の展望……四一
一二 伊豫の水軍……四六
一三 村上義弘公……五二
一四 國分寺と脇屋義助……五七
一五 大山祇神社……六一
一六 鯛網……六五
一七 海水浴……七三
一八 四阪島……七五
一九 石鎚山……八三
二〇 半井梧菴……九一
二一 詩の國……九六
二二 交通……一〇一
二三 織物……一〇七
二四 市制祝賀の歌……一一三
年中行事……一一四

今治市展望

今治市地圖



北
凡例
開町中心地
明治二十二年合併区域
大正九年合併区域
昭和八年合併区域
縮尺二万分一
今治港
海水浴場
天保山
東洋紡績会社
長崎紡績
蒼社川
立花村
日高村
乃万村
波止浜
波止浜駅
浜町
旭方
砂場
近見
清水
大新田
荒新開
浅川
高地
別宮村
治
常盤町
蔵敷
旭町
南堀通
日吉
今治駅
姫坂神社
海禅寺
大谷墓地
今治女子校
実科高女
越智中学校
今治中学校
精華女学校
染織試験場

例言

○本書は今治市民として必要な郷土に關する常識と之に對する情操を養ふ爲に編纂したものである。

○文章の程度は大體高等小學校の第一・二學年並びに中等學校の低學年に適應することを標準にした。

○編纂については今治市立學校職員中の委員十數氏が大體の骨子を定め資料を集めて起草した文案に對し縣立今治中學校敎諭玉田榮二郎氏同高等女學校敎諭小倉哲氏及び今治市立小學校訓導梅本新吉氏同渡邊伸一氏の四名を特別委員とし之に本會幹事も加はつて修補整理の事に當つたものである。

○爰に本書を刊行するに當り一言編纂の趣旨を述ぶるとともに關係各位に深く感謝の意を表する次第である。

昭和十二年二月

愛媛縣敎育會今治部會

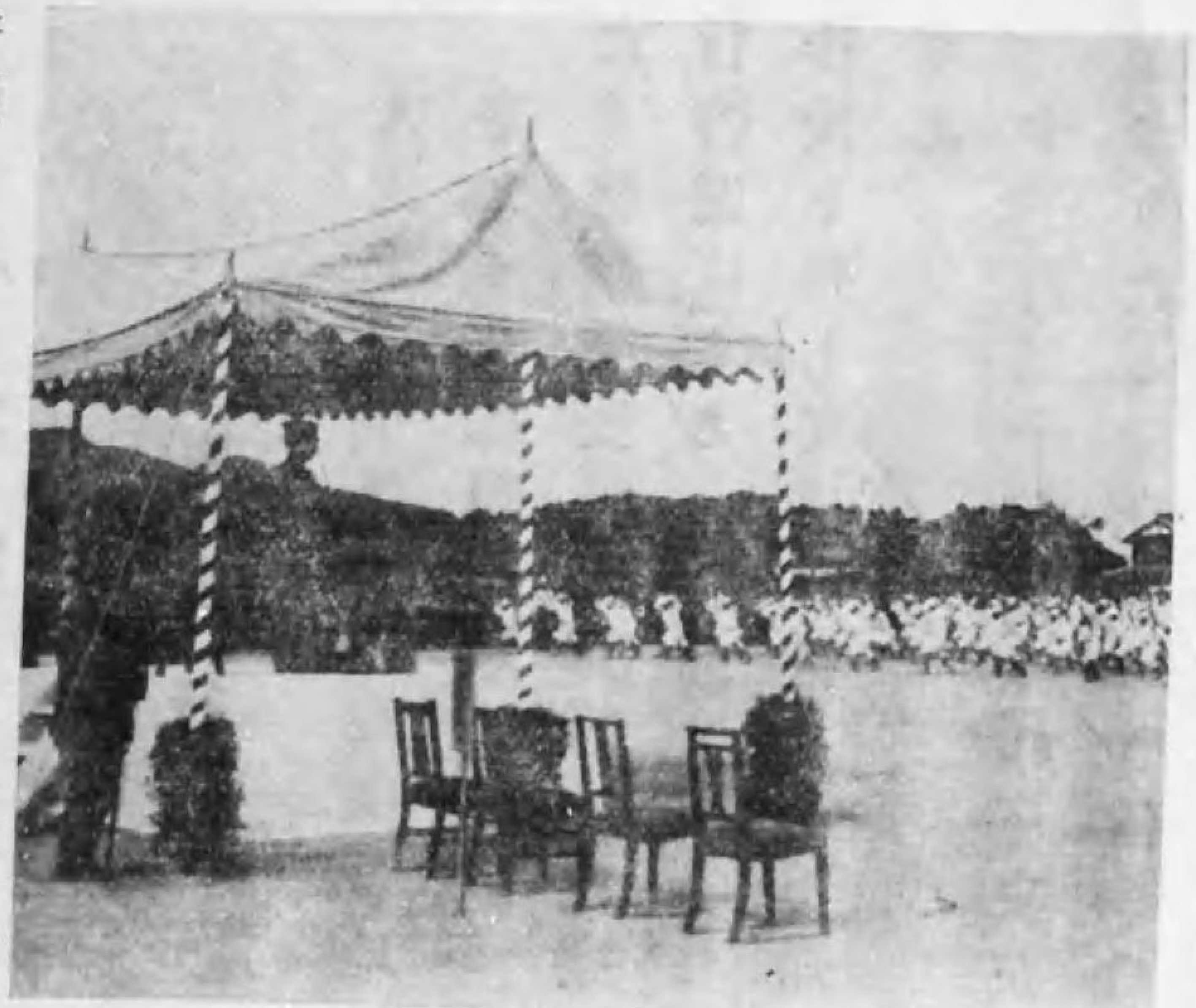
今治郷土讀本

一　東宮行啓

大正十一年秋、南海四國の地に陸軍特別大演習行はれき。時に皇太子裕仁親王殿下、攝政として親しく軍を御統監あらせられたる後、産業・民情・教育等御視察の思召を以て、更に我が愛媛縣下に行啓遊ばさるゝ旨仰せ出されぬ。百萬の縣民は此の優渥なる御沙汰を拜して感激措く所を知らず、ひたすら鶴駕の着御を待ち奉りぬ。

十一月二十二日、これぞ我が今治市が　東宮殿下の行啓を仰ぎまつりたる記念すべき佳き日なり。此の日　殿下には高松市玉藻城より御召艦矢矧に乘御、嚮導供奉の諸艦御警衛の下に晩秋の

氣澄める内海を御航行遊ばされ、十一時十分今治港に着御あり。



東宮行啓

東宮大夫・同武官長・同侍講・同侍醫及び愛媛縣知事等を從へて假棧橋に御上陸あらせ給ふ。市民等しく光榮に感泣し、歡躍欣舞の情に禁へざるものゝ如し。

やがて　殿下には人力車に召させられ、御順路本町・川岸端・常盤町を通御、刈り取られし稲田の中道を遠く今治中學校に向はせらる。沿道十重二十重に堵列せる各種團體、老若男女の心からなる奉迎を受けさせられ、絶えず御答禮を賜ひつゝ、同二十二分御到着遊ばさる。

先づ東豫諸學校生徒・兒童の成績品及び郷土史料並びに地方特産品を台覽あり。次いで市内小・中學校一千二百餘名の聯合體操を御閲覽あらせられ、且地方の功勞者に特に拜謁を賜ひ、市内の主なる工場に侍從を御差遣あらせ給ふ。

かくて午前十一時四十五分同校御發駕、御道筋常盤町・柳町等を經て吹揚城東門より台上に御登臨あり。時報塔の側に玉歩を運ばせ給ひて、片野市長よりの言上を聞し召され種々御下問あらせられつゝ、煙突林立せるわが躍進今治市の大觀と、秋晴の風光繪の如き内海の絶景を御展望遊ばさるゝこと暫し、やがて城趾を下らせ給ひて大手通・通町・本町を御通過の後、水雷艇にて御召艦に還啓あり。午後二時海岸一帶を埋むる國旗、一齊に起る萬歳聲裡に御發艦一路三津濱に向はせ給ふ。神々しくも御麗しき御英姿を眼

のあたりに拜し奉りたる市民は更に民心の作興、産業の開發、教育の進展を圖り、以て鴻恩の萬一に對へ奉らんことを固く固く心に誓ひぬ。

因みに此の日拜謁を賜はりたるは、阿部光之助・吉田春雄・越智茂登太・山岡勘造・田窪九十郎・木村敬二郎の六氏、侍從の御差遣を拜したるは、阿部株式會社・興業社の二工場なりき。

二 今治市

海に船舶の出入絶えず、陸に工場の煙突林立して黒煙常に濛々たる我等の今治市は抑如何にして生れ出で、如何にして發展し來つたものであらうか。

太古は姑く措く。人類文化の歴史によれば世が降つて人口が漸く增加すること、多人數の居住する地方には諸種の事情に因つて市場が出來るのが自然である。我が越智平野の如きもこの例に洩れず、いつしか其處此處に今治・町谷・拜志・湊・大濱・櫻井の如き大小の市場が出來て來たのである。

今治は慶長の昔藤堂高虎の築城によつて出來た城下町で、それが變遷發達して今日に至つたものである。此の地は素日吉鄕の一部で今張と稱し、姫坂神社と別宮及び東禪寺を信仰の中心としたさゝやかな船着場であつた。蓋し今張とは今墾即ち新しく開墾された土地といふ意味である。それでも吉野朝時代にはもう官軍伊豫勢の策源地にまでなつてゐたことが古い記錄によつて知られる。

遡つてこの越智平野を歴史的に考察するに、今の朝倉の地が往古その中心地となつてゐたと推定される。それはこゝに古代文

化を物語る遺蹟遺物が多く殘存するからである。其の後大陸文化が輸入された結果、今の櫻井町國分に國分寺が建設せられ、これを中心として伊豫の國府が淸水村八幡山の東方に設置されたこともあるが、武家時代となるや、地方の中心は國分城に移つた。吉野朝に脇屋義助公がこゝを策源地とせられたのでも知られる。今の國分寺附近や古國分、拜志がそれ等の人々の住宅地であり、役所の所在地であり、又市街地でもあつた。村上武慶福島正則、小川祐忠等がこの間に出た主要人物である。

尋いで關ケ原の戰の結果、西軍に與した小川祐忠は沒落し、東軍に味方した藤堂高虎は南豫舊領の外に東豫の地を加封されて、遂に二十万三千石の大侯となつた。こゝに於て高虎は大いに將來を慮り、今張の地を卜して根據地と定めた。即ち裏伊豫から表伊豫へ、外洋方面から瀨戸内海方面へと進出したのである。高虎は

當時の名將で、特に築城の權威者であつたから海陸の形勢と伊豫水軍の關係を察して、海岸を利用した平城をこゝに築いた。かくてこの地は一躍地方の行政や文化の中心地となり、附近物貨の一大集散地となるに至つた。今張の名稱に今治の文字を用ひるやうになつたのは此の頃からである。

當時の町制は現在も尙殘つて居るやうに、城廓を核心にして西北に隣り、碁盤目に區劃を立てて米屋町・室屋町・鍛冶屋町・寺町等と町家を職業別に纏めたもので、町内には多くの防火兼用の井戸を設け、市街の周圍には簡單だが土壘を繞らし、外部との出入口には番所を置く等、地方としては稀に見る警備と秩序のあるものであつた。かうした立派な町が出來上つていよ／＼繁昌しかけた時、俄に藩主が伊勢に轉封されたのは誠に惜しいことであつた。その後は義子高吉によつて繼がれたが僅かに二万石の小侯で、もは

や總べての點に於て生氣横溢してゐた高虎時代の活況は見るべくも無かつた。寛永十二年には久松定房がこれに代られたが領地は前と大差なく、之より世を累ぬること十代、その間殆ど特筆する程の發展もなく、町の盛衰も常に封侯と運命を共にしたのは城下町の性質上また止むを得ぬ次第であつた。けれどもよく二百數十年の平和を保ち商工業の中心地となり、且は地方の文化を開發促進したことは爭はれない事實であつた。其の後明治の御代となるや一時石鐵縣が置かれ、後或は越智郡役所等が設けられたので纔に舊態を持續しては來たが、何時までもかくては叶はじと苦慮の折から、先覺者の努力によつて適々ネル機業の勃興を見、日清日露の兩役と更に世界大戰の機運に際會して、躍進又躍進、終に今日見るが如き本邦屈指の綿工業都市となつたのである。

而して他面今治の地は、我が國の心臟部ともいふべき瀬戸内海に臨み、後に越智の沃野を控へ、氣候温順にして海陸の風景に富み、魚貝豊にして天惠を受くること頗る厚く、住民亦快活にして進取の氣象に富み、海を隔てゝ中國の尾道・吳・廣島の諸市とも相呼應し、遙かに阪神と關門との中央に位して東西航路の要衝を占めて居る。その上工業の勃興に伴つて海外との關係も漸く繁くなつたので、大正十一年には四國唯一の開港場に指定せられるに至つた。

之より先、大正九年には既に隣接する日吉村を合併して市制を布き、名稱もいつしか「イマハル」と呼ばれるやうになつていたのを古に復して「イマバリ」と呼ぶことに改めた。市の紋章も此の時制定したのである。更に昭和八年には近見村をも併せてこゝに戸數一萬餘、人口五萬餘を抱擁する縣下第二の大都市となつた。

嗚呼、我等の海港大今治、工業都市大今治はかくの如くにして生れ出でかくの如くにして發展し來つたのである。而も世運に乘

じて一大活躍を期すべき明日の到つたことが痛感せられる。今治市の前途誠に多望なりといふべきであらう。

三 今治城を聽く

わが郷土史研究の權威者某先生を迎へて、一夜今治城を聽く座談會を開いた。和やかな空氣の中に會は滑らかに運ばれて行つた。

「今治城を築くのには何年位かゝつたものでせう。」

「さうですね。藤堂高虎がこの地方を領するやうになつたのがたしか慶長五年十一月であつたと思ひます。それから領内を捜し廻つた末、海陸の要所であるこの今治を最適の地と定め、同七年六月工を起し、九年九月に完成してゐるやうであるから其の間僅に二年四箇月今からざつと三百三十年許前になります。」

「お城の設計は高虎自身がしたものでせうか。」

「勿論さうでせう。築城については隨分見識のあつた方で、今治の地に膳所の築城、伏見・江戸・大阪城の修築さては日光廟の設計等にも關係してゐます。但し今治城を築く時工事監督となつて働いたのは、家老渡邊勘兵衛と普請奉行木山六之丞の二人だといふことです。今吹揚神社の直ぐ前の石段の右側にある勸兵衛石といふのは、彼が城の威容を

今治城

示す爲に大手門の見附に据附けて置いたのを、先年あの矢野七三郎氏の銅像建設の時に現在の位置にうつしたものです。又木山は頗る面白い人で、自分の風采を唄に作つて朗かに音頭を取りながら石を運ばせたり、地固めをさせたりしたさうです。今も木山音頭といつて傳つてゐますがいつか廣島放送局から今治の夕に放送したことがある筈です。」

先生は徐に質問に應じて懇切に答へられる。

「僕はこんな話を聞いたことがありますが本當でせよか。何でも築城の時に、「船に一杯石を積んで來たら、其の代りに米を一杯やらう。」といふお布令を出しました。そして初はお布令通りにお米をやつたといふのです。ところがどうでせう、忽ち今治の浦は諸方から集つた石船で一杯になつてしまひました。その時です。突如「石はもういらぬ。持つて歸るなり、捨てるなり勝

手にするがよい。しかし船の往來を妨げるから海中へ捨てることは一切ならぬ。」といふ嚴しいお布令、集つて來た船は仕方がないので皆石を海岸に打捨てゝ歸つて行きました。それを素早く集めさせて築いたのがあのお城だといふのですが。」

「さやう、そんな話も傳はつてゐますね。しかし高虎はそんなお方ではありません。中々の人物で敬神尊王の念にあつく且よく部下を愛し、極めて人情味の豊かな義理がたい良將だつたやうです。高虎の書かれた高山公二百條といふものがありますが、其の中に、「總別人は上下とも心を正しくして、一言半句も嘘をいふべからず。人を疑ふべからず。」とあるのでもよく判ると思ひます。」

「それではあの石材は何處から取り寄せたものでせう。」

「あれは元福島正則の居た府中城をこはして運ばせたのだと云

つてゐますが、何れ領内から大部分は補はせたものでせうね。」

「城の特徴といふべきところは、」

石垣・堀・櫓を設けた上に、銃砲使用に便利な西洋流をも加味し、更に和蘭人が臺灣の安平に築いたゼーランヂャ城即ち海國城のやうに、平地を選んで堀に海水を引いたところ等でせう」

「お天守はあつたのですか。」

「天守閣は無かつたのです。しかし此の繪圖をごらん。これが當時の畫家沖冠岳の畫がいたものです、隨分立派でせう。こんな壯大なお城が天空に聳えて海陸を威壓した姿を想像してごらん。當時の人は驚きの眼を見はつて「見たか、聞いたか、今治の城を」と唄つたものださうです。」

一同はこゝに鮮かに描き出された今治城の全貌に接して其の威容の堂々としてゐるのに交々驚歎の聲を放つた。そして更

に熱心に質問應答を重ねた。

「なぜこんな立派なお城を毀してしまつたのでせう。」

「それは明治二年版籍を奉還すると、藩主久松定法は直ちに知藩事に任ぜられましたが、四年更に廢藩置縣の際華族に列せられたので、藩民に別れを惜しみつゝ東京に移住せられました。それでもうお城など必要がないと思つたのでせうね。　城壁・樓櫓悉く打毀されてしまひました。」

「惜しいことをしたものですね。　若し當時のまゝに保存されて居て、朝に夕に莊嚴な姿を仰ぎ見ることが出來ましたら、わが市民の精神上にどんなに大きな影響をもたらす事でせうに、殘念なことです。」

「いかにも。　今から考へれば取返しのつかぬ口惜しさですが、時勢の力がさうさせたのですね。　當時の極端な歐化思想は文明

開化の新時代にこんな丁髷時代の遺物はもはや無用の長物だとしてしまつたのです。いつの時代にもよくある實利的な考へから、自分等の持つてゐる貴いものを眞に貴いと氣附かなかつたのです。」

話は佳境に入つて興趣いよ〳〵盡きず、一同ありし昔の今治城のなつかしい面影を偲びながら夜更けて會を閉ぢた。

四　藤堂高虎

豐太閤朝鮮征伐の時の事である。

或る晩藤堂高虎の士卒が敵の哨船を襲ふて、其の數艘を分捕り大將を斬つたので、味方の大評判となつた。

それを聞いた負け嫌ひの加藤嘉明は密かに塙團右衛門を召して謀を運らし、不意に敵の根據地をついて軍船百六十餘艘を分捕つた。

嘉明は得意遣る方なく自ら、

「自分が勳功第一だ。」

と揚言したので、高虎は

「船軍の先頭は我輩である。」

と反駁した。嘉明は居丈高になつて、

「いや貴公のは夜討で、譬へば敵の寢首を搔いたに等しい。而もそれは貴公御自身の仕業ではないといふ。然るに拙者は自ら部下を指揮して白晝敵を襲ひ、數多の軍船を分捕つたのでござれば、貴殿が如何に梯子をおかけなされても、よもや拙者の功名には及びますまい。」

とあたり憚らず言放つた。高虎は大いに怒つて、刀の柄に手を

かけて一擊の下に斬つて拂はうとした。

軍監は透さず之を押し止め、且取り裁いて、

「藤堂公の士卒は夜間逸早く、敵の哨船を奪つてその大將を斬つた。勳功蓋し其の右に出づる者はあるまい。而して士卒の手柄は卽ち主將の手柄でござらう。」

といつた。列座の諸將も皆これを肯んじたので、終に高虎は殊勳第一等にきまつた。

此の事あつて以來嘉明は深く高虎を惡んで交を絶つに至つた。ところが皮肉にも關が原の役に高虎・嘉明の兩將は東軍に味方して共に軍功を立て、高虎は今治其の他に於て二十万三千石を、嘉明は松山地方二十万石を領するやうになつたので、いはゆる「兩雄竝び立ち難し。」の例に洩れず、益々反目して事每に相爭つた。

さて高虎が今治城を築いて間もない時の事である。變裝の一

武將が城內の樣子を搜らうとして密かに西の城門から入らうとしたのを、門番仁助がそれと睨んで入城を拒んだ。後でそれが松

高虎肖像

山城主加藤嘉明であるといふ事が判つたので、高虎は仁助を召出して大いに之を賞し、爾來西の城門を仁助門と呼ぶやうになつたといふ。

其の後寛永四年會津城主蒲生忠鄕が卒して世嗣が絶えたので將軍家光は高虎の武名を重んじ密かに召して、

「會津は奥羽重要の地で人を得難い。汝を移して鎭としよう。」

と命ぜられた。高虎は

「恐れながら臣は年老いてもはや其の任に耐へませぬ。」
といつて辭退した。
「さらば誰がよいと思ふ。」
家光は反問された。高虎は
「今、天下の諸大名中、忠勇老練、加藤嘉明に及ぶ者はござりますまい。願くは彼を擢んでられますやう。」
とお答へした。家光は怪しんで、
「汝多年嘉明と不和なりと聞くに、今、彼を推薦するは何故か。」
と尋ねられた。
「臣が嘉明と交を絶つは私の小事で、これは公の大事でござります。どうして私事を以て公事を捨てられませう。」
高虎は謹んで答へた。家光は坐を正して、
「公事のために私事を忘れ、怨に報いるに恩を以てするは誠に見上げた心掛だ。」
といつて、いたくお賞めになり、嘉明を會津四十万石に移し、且高虎の言を傳へられた。
嘉明は命を受けて感激し、即日請うて高虎に見え、その非を悔い、その恩を謝し、終に水魚の交をなすに至つたといふことである。

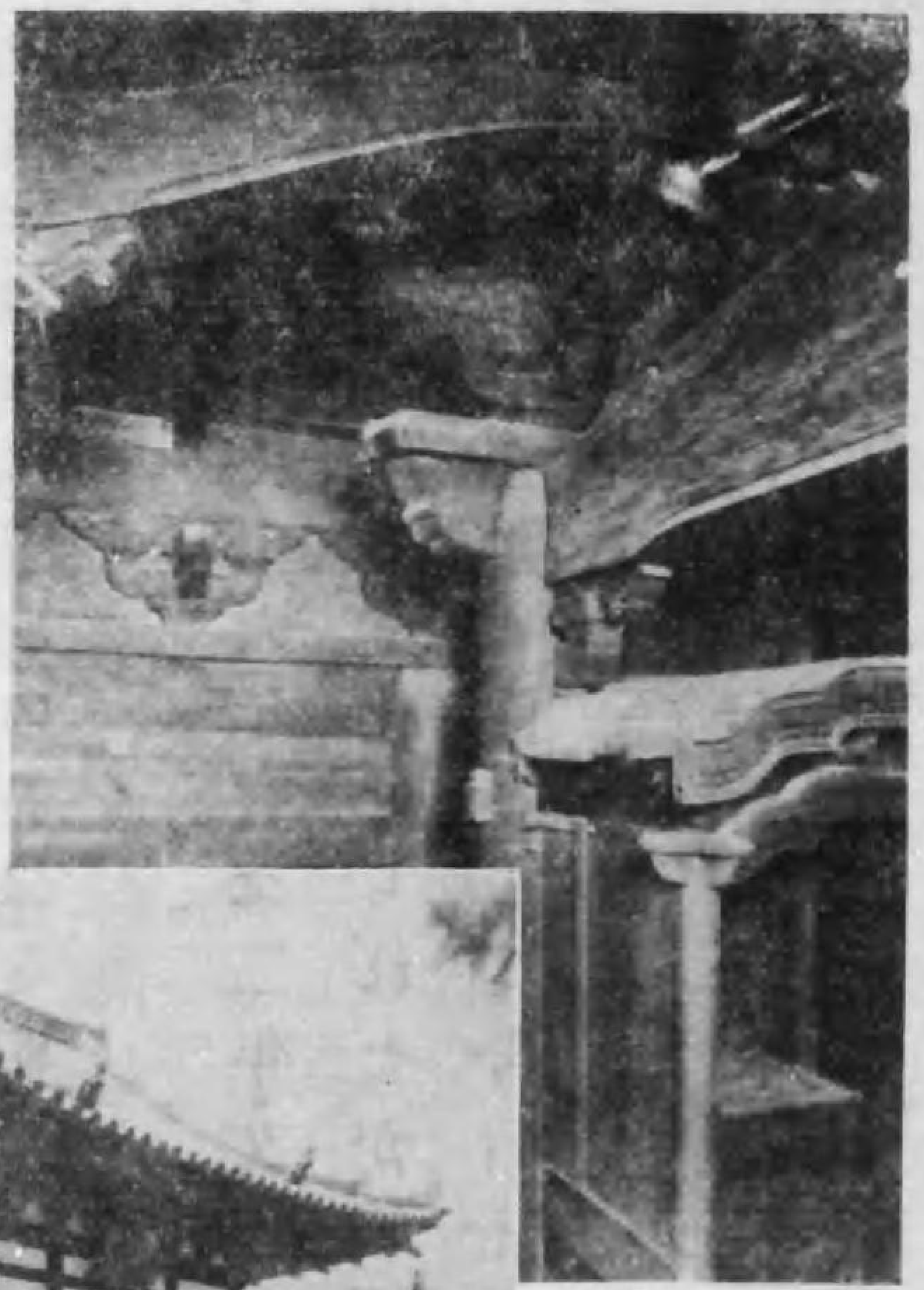
五　東禪寺藥師堂

國寶として現在國家の保護を受けてゐる建築物の數は、全國で一千四百七十餘棟に上るが、其の過半は舊都奈良・京都の兩地方に存在し、四國には僅かに二十を數へるに過ぎない。しかし其の半數の十棟が我が伊豫國に在つて、しかも實質上優秀な作に富むことは我等の大なる誇とせねばならぬ。市内藏敷に在る東禪寺の

藥師堂は、温泉郡和氣村に在る太山寺の本堂と共に、禪宗の建築樣式を傳へてゐるものとして眞に唯一獨自の規構を保つ貴重な建築である。

東禪寺はその昔河野氏の祖越智益躬が、夷賊、鐵人を討つた時戰死した多數部下の英靈を弔ふために建てた寺といはれてゐる。豪族河野氏は代々此の寺を崇敬して來たが、承久の忠臣通信は更に七堂伽藍を建造した上寺領を加へ、其の六代の孫通綱は堂塔を再建した。現在の藥師堂は國守河野通宣が永正十五年（紀元二一七八）に四海平安、萬民豐樂祈念の爲に寄進したもので、三間四面、本瓦葺の單層入母屋造に造られ、内部は土間で正面に須彌壇を設け、壇上に廚子を置いて、これに僧行基の作といはれる藥師如來が安置してあり、又須彌壇の後方に二つの脇壇があつてこれには十二神將が安置してある。

藥師堂の國寶的價値は、禪宗寺院建築の模範的樣式を具へてゐる點にある。尙之を略述すると、双盤を礎石に置き、柱脚部は地貫を入れ、内部の中央後方寄りに二天柱を建て、内部の梁行に二條の大虹梁を渡し、蟇股を用ひ、平三斗詰の斗拱を組み、化粧天井とし、軒は二重疎垂木にしてある。そして正面及び背面の中央間には桟唐戸を入れ、正面兩脇間及び兩側面中間には火燈窓を取つて之に弓欄間を入れてあ



東禪寺
内部
全景

る。その肘木・斗拱に施された繪樣の曲線は優美で、虹梁・蟇股・花肘木、亦稚趣に富んでゐる。又軒垂木の鼻にも皆繪樣を刻んであるが、軒は反轉濶達、簡潔無礙を極めたものである。之を要するに、總体の形式手法、共に奔放奇拔に配するに清楚優緻を以てし、平面及び立面の意匠・結構何れも足利時代中期の特徴を明らかに認められる貴いものである。

春風秋雨四百餘年、その間に慶長十六年・寶文二年・文化二年等に數回修理が施され、内部の構造も多少變化せられたが、戰國爭亂の世よく兵火の難を免れ、雷火の厄を避け、儼として今日まで其の威容を保つことを得たのは奇蹟と稱すべきである。

史蹟に富む東洋の一角、我等の河野氏發祥の地に、名工の手に作られた此の尊い堂宇が、明治の聖代に特別保護建造物に指定せられ、更に昭和十年には根本的な大修理を加へて完全に復原されたので、創建當時の姿さながらを今まのあたりに見ることを得るのは大なる幸慶といはねばならぬ。

我等は其のかみ、松青く砂白き所、七堂伽藍輪奐の美を盡した東禪寺を偲び、法燈永へに此の地に輝かんことを念願して止まない。

六　市役所

今治市役所は市の中央廣小路にある。市役所は市の自治事務を執るところであるが、また國縣の事務をも取扱ふのである。今治市役所では之等の事務を執る爲に庶務・戶籍・土木・敎育・社會・産業・稅務・會計・水道の諸課を置き、各課に課長・係主任・係等の吏員があつて夫々其の課に屬する事務を分掌して居る。又別に港務所があつて、所長及係員を置き、港灣に關する事務を掌つて居る。

市の吏員を指揮監督するものは市長である。市長の事務を補佐し、市長事故ある時之を代理するために一名の助役が居り出納其の他の會計事務を掌るために一名の收入役が居る。市長・助役・收入役を俗に市の三役といつて居る。

市長は又市を統轄し、市を代表するものであつて、市長の擔當する事務の主なるものは次の通りである。

一、市會及び市參事會の議決を經ねはならぬ事項に付議案を發し、議決した事項を執行すること

二、市の財産及び營造物を管理すること

三、市の收入支出を命令し會計を監督すること

四、證書及び公文書類を保管すること

五、法令又は市會の議決に依つて使用料・手數料・市稅等を賦課徵收すること

六、其の他法令に依り市長の權限に屬すること

今治市の市會議員の定員は三十六名であつて、市參事會員は十名である。之等の員數は市の人口に依つて定まるのであるから、今後今治市の人口が增加するに從つてその員數も增加する譯である。

市長は市會に於て選擧し、助役・收入役は市長の推薦に依つて市會が之を定め、其の他の吏員は市長に於て之を任免するのである。なほ今治市の施設と、經營してゐる事業を擧げると大體次の通りである。

一、敎育施設

小學校・青年學校・圖書館

二、社會施設

公園・市營住宅・職業紹介所・公益質屋・救護院

三、交通運輸施設

港灣・市內乘合自動車

四、衞生施設

水道・傳染病院・塵芥燒却場・火葬場・墓地

五、其の他

公會堂・屠場

今後、今治市が發展するにつれてその施設も整備し、經營する事業も漸次增加するものと思はれる。

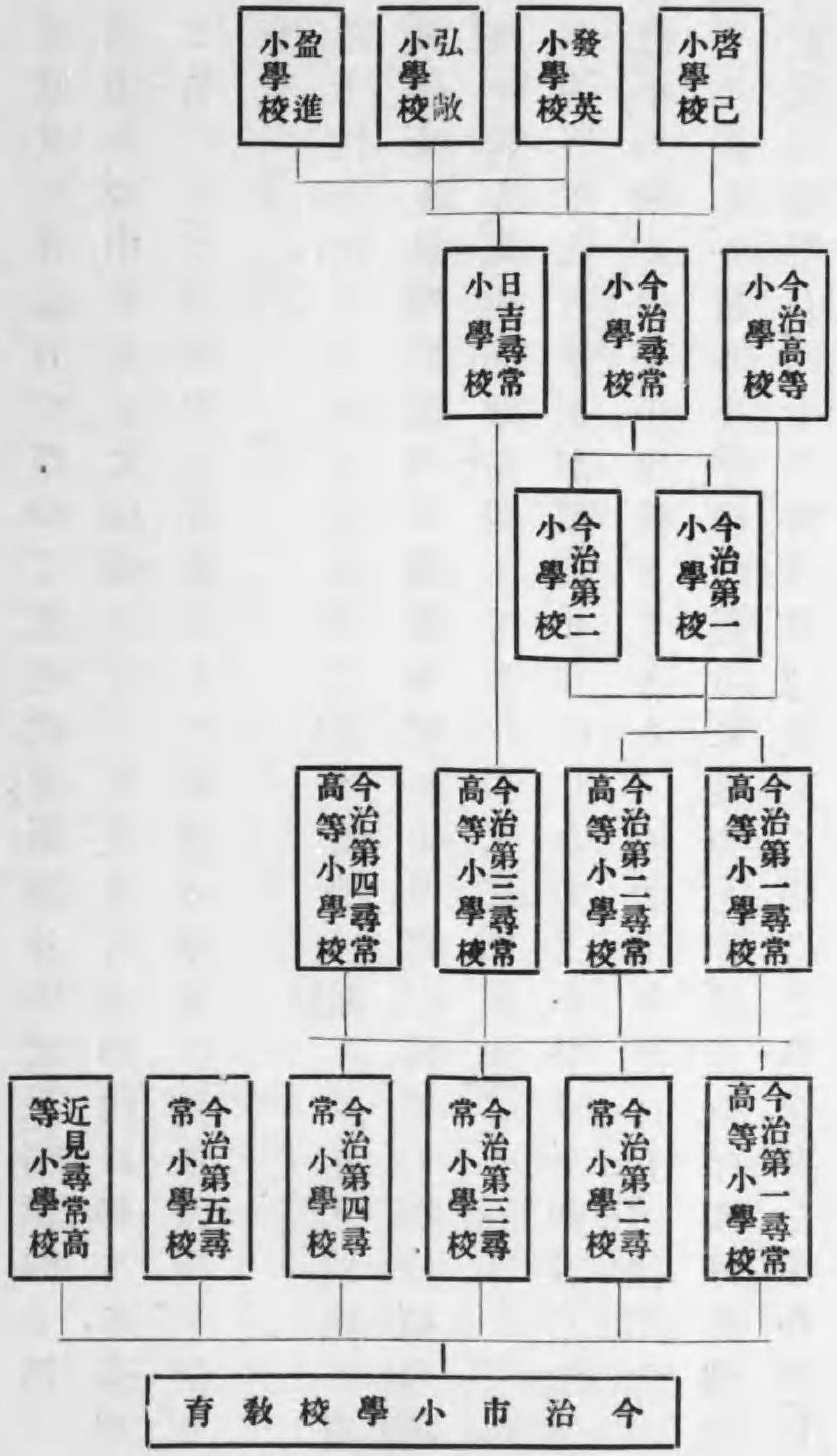
七 教育

今治市に於ける教育は藩學に端を發してゐる。久松家第三代定陳公は江島爲信を登用して學事を獎勵し、又自らも經書を講じた。文化二年四月に至つて第七代定剛公は家老服部伊織と議して、學館を城中南堀端に創設した。後之を大手門內に移して克明館と名づけ、長野恭度を學頭として和漢の學及び兵法醫術を講ぜしめた。

第十代定法公の時久松長世監物は時勢に鑑みて洋式教練を施し、又藩士を長崎に送つて蘭學を修めしめた。維新の際は碩學萩原裕を聘し、克明館を擴張して大いに文武兩道を奬めた。

明治五年八月學制が頒布せられたので二小學校を創設した。啓己小學校と發英小學校とである。明治十年更に弘敞、盈進の二校を增設し、一時四小學校を見るに至つたが、同十六年四月に盈進を發英に合併し、二十年四月學制改正と共に之等を廢して今治・日吉の二校とし、別に今治・日吉別宮組合立今治尋常小學校及び越智野間郡立今治高等小學校の二校を新設した。

今治市小學校沿革一覽表



其の後町村制實施に際し今治町に二校、日吉村に一校とし、大正九年市制實施と共に之を今治第一・今治第二・今治第三尋常高等小學と改稱したが、就學兒童の增加に伴つて順次今治第四・今治第五の兩小學校を新設した。又昭和三年四月より高等小學校改善の爲、全市の高等科兒童を今治第一小學校に集めた。昭和八年二月近見村を市に合併したが、近見尋常高等小學校はそのまゝ存して今日に至つてゐる。

中等教育は明治十年今治に教員養成所が設立せられたのが初である。明治十四年に至つて郡立越智中學校が開設せられたが、幾許もなく廢校となつた。其の後久しく當地方に中學校の設がなかつたが、明治三十五年四月に至つて縣立西條中學校今治分校が開設せられて、校舍を城南の地に建設した。當時生徒定員二百五十名であつたが、三十八年四月より獨立して縣立今治中學校と

なつた。爾來次第に發展して定員八百名となり、大正九年十一月市内日吉に移轉新築し、更に定員一千名に增加した。然るに其の後教育の振興と經濟界の好況に伴ひ入學志願者數の激增するや、甚しき入學難を招來したので之を緩和する爲に、今治市及び越智郡各町村協議の上、大正十五年四月公立越智中學校が設立されるに至つた。同校は常盤町九丁目にあり、定員四百名、鐵筋コンクリート建にして、夙に作業科・實業科を課して特色ある教育を行つてゐる。

女子教育については明治三十二年四月、地方有志の首唱により町立今治高等女學校を設立したが、同三十四年之を縣立に移管した。爾來次第に發展して大正九年生徒定員を八百名に增加したが、校地校舍が狹隘を告ぐるやうになつたので、新校地を日吉夏目の地に相し、昭和四年改築の工を起し、同六年完成移轉した。又私立

實科高等女學校は明治三十九年の創立であつて、初め市内山里通にあつたが、昭和五年現在の驛裏に改築移轉した。私立今治精華高等女學校は大正十五年四月の創立で常盤町七丁目にある。

實業教育の振興は商工業都市今治の發展上特に緊要の事であるから、早く今治第二・今治第三の兩小學校に商業農業補習學校を附設したが、大正十年四月之を合併して市立實業補習學校とした。又近見村合併後も近見實業補習學校は其の儘存置した。しかし此の兩補習學校は昭和十年に至つて青年學校に改められた。

其の他今治市の教育機關としては、尙、私立今治實踐商業學校・私立今治中等夜學校・今治・昭安・若葉の三私立幼稚園がある。又教育に關聯した修養機關としては、明德圖書館・愛媛縣教育會今治部會・男女青年團・少年團等もそれ〴〵組織せられてゐる。最近に結成せられた今治保導聯盟も兒童生徒の保護善導機關として當市の

敎育上見遁すことの出來ない存在である。

九堀牡蠣

吹揚公園に行つた人はお城の堀の中に棒杭に丸竹を横たへたものが數知れず整然と列んでゐるのに氣がつくであらう。あの竹には一尺おき位に牡蠣の殼をつけた針金を垂下して堀牡蠣の養殖をしてゐるのである。

この堀牡蠣は明治十一年に砂田重治翁が試みに廣島牡蠣を移殖したのに始まり、其の後次第に研究を重ね、品種にも養殖法にも非常な改良を加へて今日に至つたものである。

牡蠣は晩春から夏にかけて産卵し、一貝よく六千万粒を産出するといはれてゐる。水温の暖い日、舟に乗つて仔細に觀察すると、産卵放出してゐる樣が肉眼でも認められる。卵から發生した幼

生は纖毛によつて運動し、波のまに／＼浮游すること約二週間にして岩石・木片等に縋りつく。此の時牡蠣や、たひらぎ等の空殼を連ねた針金を水中に張つておくと、幼生は之れに附着する。附着した幼生は少しの間匍匐してゐるがやがて固着生活を始める。

堀牡蠣は陽春の頃、蠶豆大の二年生稚貝を移し入れるのであるが、四五年前から陸前松島産の物を用ひてゐる。移し入れられた稚貝は水中に出來る硅藻類や其の他の微生物を澤山胃嚢の中に取入れてぐん／＼と成長する。堀には堰があつて干潮時と雖も一定の水位を保つことが出來るから、牡蠣は嚴寒酷暑にも害されず、且赤螺・れいし・海星等にも侵されず、發育は頗る良好で他地方産のものよりも遙かに大きく、其の年の十一月から翌年三月迄に採取するのである。

牡蠣は我が領土内では北は樺太から南は臺灣に至る迄棲息し

ない處はない。そして裏日本よりも表日本に多く、殊に淡水の注ぐ内灣や内海の干潮線附近に多い。

牡蠣は榮養品中の王座を占めるもので、滋養に富み且消化し易いから、歐米人も早くから之れを養殖したといはれてゐる。ナポレオン一世が奢侈を極めた時代、佛蘭西では俄に牡蠣の需要が激増して天然産のものが濫獲されたといはれ、又ビスマークは非常な健啖家で牡蠣を最も好み一度に百七十五を平げて人々を驚かしたことがあるといはれてゐる。

一〇　郷土の氣候

一、夕凪　夏になると海岸や町家の屋上や町はづれの家々の門口などに涼み台が持出される。夕食が濟むと團扇を手にした浴衣がけの人々がこの涼み台に集つて、四方山の話にそよとの風

もない夕方の蒸し暑さをしのぐのである。然し其の風の無いのも僅かの間で、八時すぎにもなればきまつたやうに山の方から生き返る樣な涼しい風が吹いて來て、人々に生氣を與へる。この無風の間を夕凪と云ふ。夕凪は瀨戸内海の沿岸に起る特異な現象で、殊に四國地方に著しい。從つて阿波には阿波の夕凪があり、讃岐には讃岐の夕凪がある。

今治地方の夕凪は夏の夕方によく見る現象であるが、熱帶地方では四季共に起り、其の時刻が常に規則正しいから時計の代りになると云ふことである。

二、海風と陸風　夕凪のある地方では、朝の十時頃海から陸に吹き込む風が出る。そして日の傾く頃まで吹き續く。海風が止むと暫時無風狀態になつて、いはゆる夕凪を呈するのである。さて夜分になると、今度は陸から海に向つて吹く風が出る。この

風は日の出頃まで吹續く。これを陸風と云ふ。陸風が止むと、又暫時無風狀態となつて、いはゆる朝凪を呈するのである。この海陸風は天氣好晴の日に著しく現はれ、不良の日にはないのが通例である。海岸地方に住む漁業者はこの風の如何によつて天氣を見極め、陸風を利用して夜釣に出かけ翌朝海風に帆をあげて家路を急ぐのである。

三、冬の風　冬になると今治地方には乾き切つた寒い西風が多い、之は冬の季節風で、シベリヤの內部に發生し、日本海を越え、本州の北西面に吹きつけて、遠く此の地方まで渡つて來て、越智平野では山路おろしや五十嵐おろしとなる。

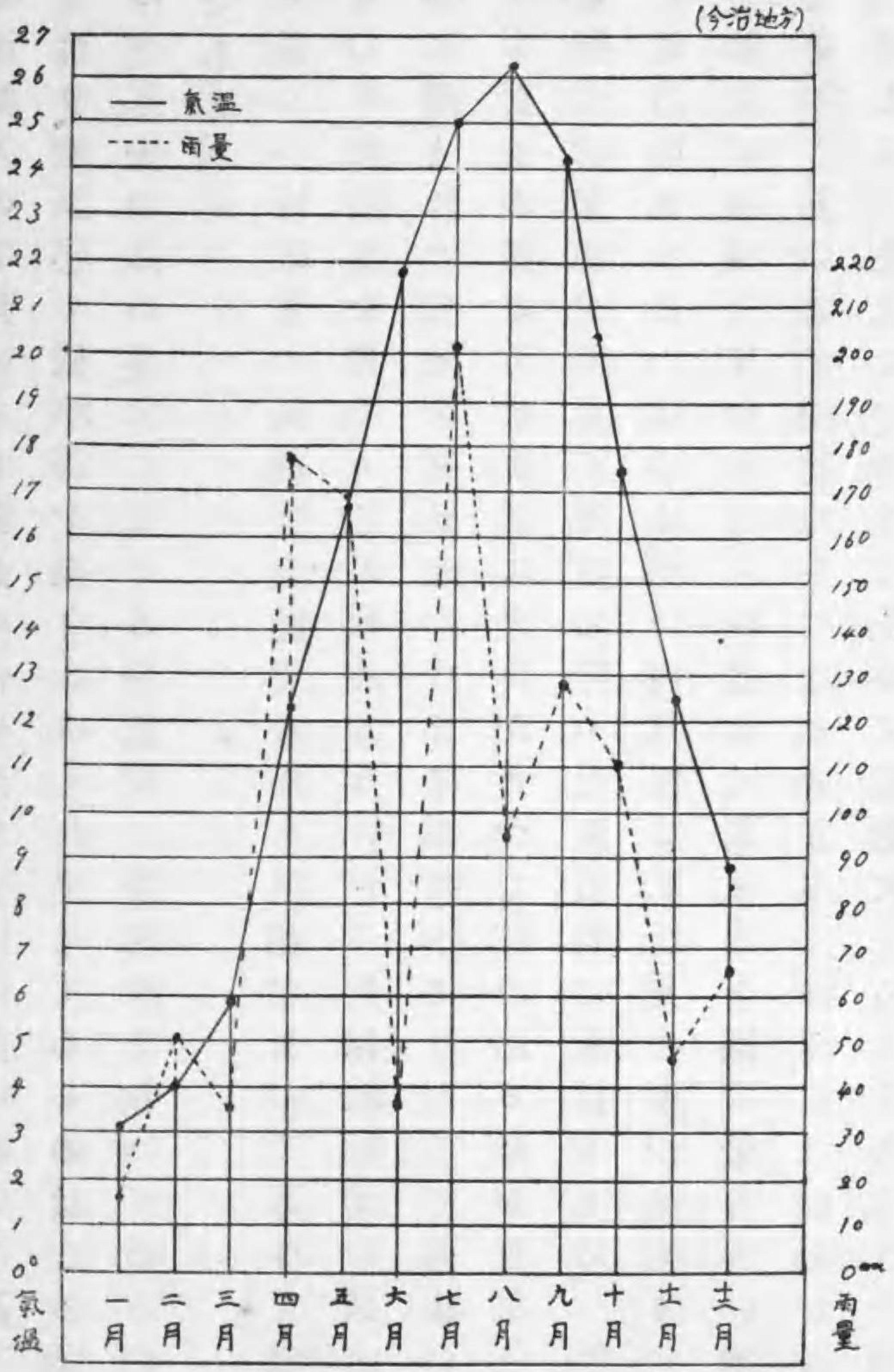
山路おろしは今治地方に一番強く當る風で乃万・大井に通ずる松山街道の谷を吹出るものをいひ五十嵐おろしは高繩山から、蒼社川の谷に沿うて吹下るものをいふ。

今治地方の平野にある家が申合せたやうに西側に杉の生籬をしたり、煉瓦塀や板塀等を築きまはしたりしてゐるのは、この恐るべき冬の風の襲來に對する用意深い防護陣を敷いてゐるのである。

四、氣溫　今治地方の氣溫は全國でも最も溫和なものであつて每月の平均溫度を見ても殆ど較差がない。これは地形が中國山脈に圍まれた盆地の樣になつてゐる爲である。けれども海洋と平野と山麓とでは氣溫に差異があつて蚊の出る時が異なり、豆類の發芽期が異なり、霜露の降りたる日時に相違がある。

今治地方の氣候はいはゆる、瀨戶內氣候として見る事が出來る。即ち氣溫は溫暖で年中あまり較差なく、雨量も全國で最も少い地方である。其の爲に山麓地方には溜池が多く、海岸には鹽田が發達してゐる。住民はかやうな氣候の影響によるのであらう、一般

昭和十一年度氣温雨量グラフ表



に性質が朗らかで明るい色を好み極めて快活である。

世界に於て地中海沿岸、アメリカのカリフォルニヤ州等は氣温や雨量がほゞ此の地方と同じく、住民の性質等も類似する點が多いと云はれてゐる。

一一　近見山上の展望

襦袢一枚の背中がじつとりと汗ばんで來る。「もう一息だ。」さう思ひながら、小松の疎らな坂を登りきると、いよ〳〵近見山上である。

山上には南面したさゝやかな御堂がある。明神様を祀つてあるといふ。御堂の北側に廻つて見渡すと、何といふ麗しくも又廣い風景であらう。波穏かな多島海の鳥瞰圖が一眸の裡に展開せ

られて、明媚といはうか、優雅といはうか、悠遠といはうか、殆ど言語に絶する景觀である。眼下には碧の海を挾んで畫がいたやうに美しい來島、小島を始めとして、白堊の燈台のくつきりと立つ仲渡島、島山のうね〱續く大島などが北に列び、遠く東の方には燧灘を抱く讃岐の連山が霞に眠つて、その間に比岐、平市、煙突でそれと知られる四坂等の島々が方幾十粁の盆景のやうに布置せられて、さながら一大風景畫である。島と島、海と島とが、或は歩み寄つて語るが如く、或は離れて、默する

近見山の展望

が如く、海峽を作り、港灣を抱き、大小、高低、遠近、濃淡、樣々に織りなされて變化は眞に窮りがない。

かうした靜的な畫面に船の動的な點描を加へて、景色は生彩を發揮して來る。小蒸汽船は木の葉のやうに浮かんでゐる。漁船を縫ひながら左に右に通航する。沖の霞から生れて、やがてほの〲と夢のやうに島隱れゆく白帆もあれば、發動船の鼓動もせはしげなのに引きかへ、黑煙を棚引かせながら悠々として海路を樂しむ大汽船もある。

眼を東から南の方に轉ずると生氣潑剌たる今治市が手に取るやうに展望される。人家の密集する間に一きは大きく見えるのは公會堂で、右の方に細い紐の樣に斷續するのは停車場に通ずる廣小路であらう。港には突堤が長く海中に這出て四國唯一の開港場たるにふさはしく、市街には到る處勢よく黒煙をはく工場の煙突が競ひ立つて、流石に工業都市四國の大阪らしさを思はせる。「自己の眞の姿を知らんには自己を離れて見るに如かず。」とか。いかにも此處から見れば人家の密度、煙突の林立、汽船の出入、汽車の發着、人馬の往來等、目に映ずるもの悉くが躍進大今治市の實相を示現してゐる。

帶のやうに伸びた蒼社川の松林が南に盡きるあたり、清水・佐禮・日高等の入組んだ山襞によつて劃られた綠の平野と、そこゝに散在する民家の聚落を面白しと見ながら次第に首を右から後に返すと、脚下に波止濱の鹽田が俯瞰される。綺麗にかきならされた砂濱の中に列んだ藁屋から、鹽燒く煙の薄く立昇つてゐるのは繪にも書かまほしい景色である。

一わたり見渡して再び眼を海の方に回せば、東北に打開けた燧灘は折柄靄つた日のために眺がますます遙かにして美しい。先に見た船影はいつしか拭ひ去られて更に新なものが點出せられ、白浪渦卷く來島海峽には今しも外國通ひであらう、海の丸ビルの樣な巨船が用心深く難航路を徐行してゐる。その昔伊豫水軍の總帥來島族が居城を構へてゐたといふ島山の麓だけに、彼是思ひ合されて面白い。二たび三たび身をめぐらしてパノラマの樣な山水の景勝にたゞたゞうつとりと魂を奪はれる。

われや今夢か現か、現とも知らず五月の海を眺むる。

先年楠岡謙吉氏は天下の絶景だと叫んで近見山を公園にする

の計畫を立て百方盡力されたが。不幸中道で病の爲に斃れられた。聞く所によれば氏は臨終の際まで近見山のことを口にされたといふ。そゞろに故人を偲びながら此の大觀に對すれば、海の色にも島の姿にも一種の貴さを覺えて、思はず故人の言に和して「實に天下の絶景だ。」と口ずさむ。最近西瀨戸内海第一の景勝として國立公園に編入しようとの話が擡頭して來たのも尤だと思ふ。

嗚呼心ある人に見せたいのは近見山上の展望である。

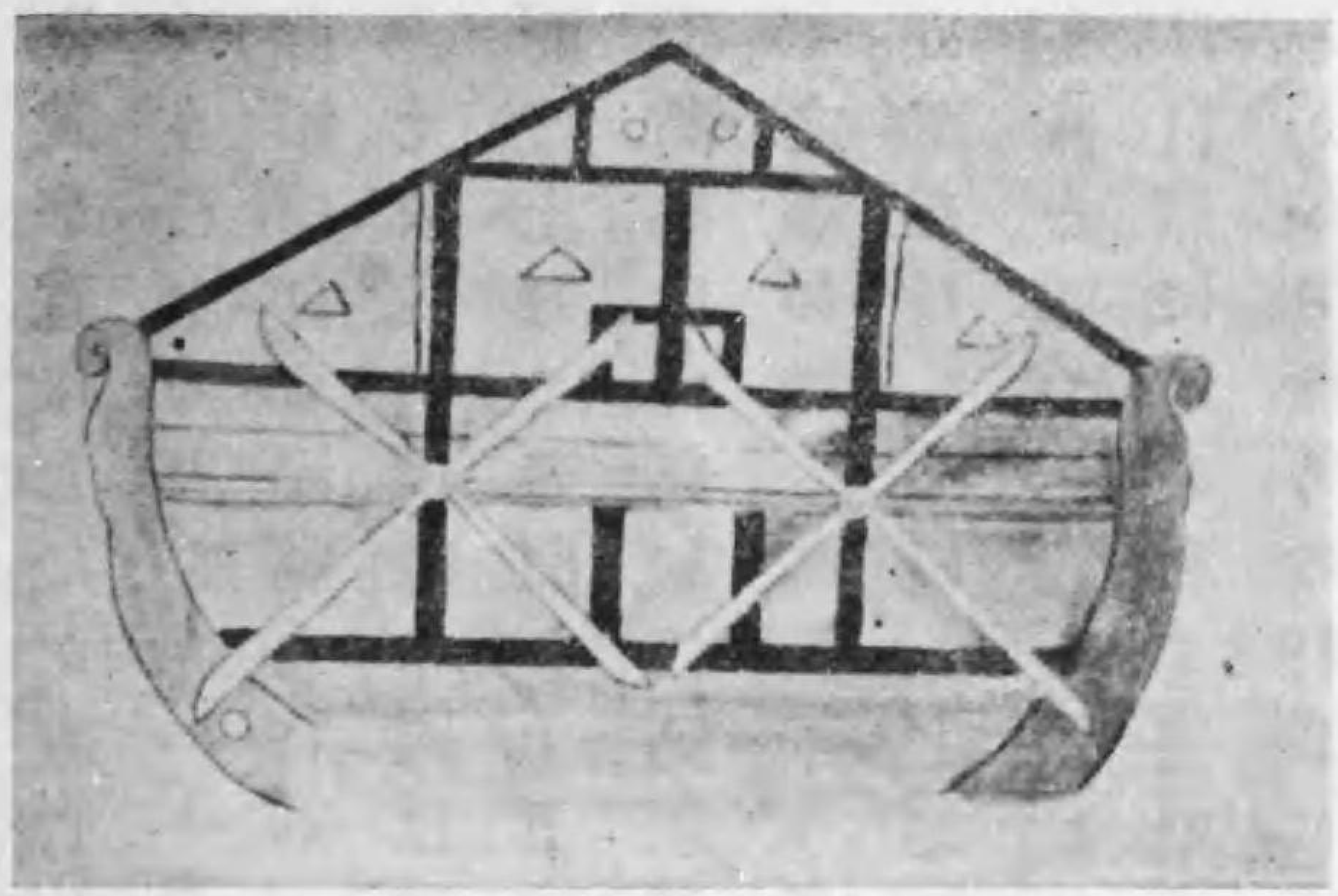
波止濱の塩やくけむりほの〴〵と立ち立つほどに
春ふかみ行く
　　　　吉井　勇

一二　伊豫の水軍

伊豫の水軍の意義は時代によつて違つてゐる。上古は海上の盜賊を意味したが、吉野時代頃は、海上の豪族、或は海軍を意味するやうになつた。そして其の將士を海賊衆、其の船を海賊船といひ、首領は自ら海賊大將軍と呼んでゐた。

元來我が伊豫の國は地勢上水軍の發達に適してゐた。九州方面と上方との間を上下する船は、是非とも伊豫の沖合に點在する大島・來島・因島・屋代島・忽那七島等の間を通らねばならない。從つて之等の島々は附近を通行する船を窺ふに最も便利な位置を占めてゐた。その上之等の島々の住民は水路に通曉し、潮流暗礁の危險を知つて、船を操縱する術が極めて巧であつた。彼等の中には自然に地の利と已の力をたのんで徒黨を組み、通行の船舶に挑みかゝるやうな行爲にも及ぶ事があつた。伊豫の水軍はかうして起り、時代を經るに連れて漸次其の勢を増して來た。

そこで戰亂の世、瀬戸內海で力を爭ふ者は、どうしても水軍の援助を得なければならない狀態になつた。だから、よしや彼等が多少よくない振舞をしたとしても、武士達もあまりやかましくいふことが出來なかつた。彼等の勢力は增大した。そして終には城塞を設けて監視し、通行の船舶に一々停船を命じて一種の通行稅のやうなものを納めさせた。若しそれを知らぬふりして通りぬけようとするとひどい目にあはせてゐた。かうして彼等獨特の水軍の術を研究し、軍船と海戰術とを造り出してゐたのである。



伊豫の海賊船

彼等水軍の兵書を見ると海賊流・三島流・能島流・一品流などの流儀があげてある。又其の軍船の中には車輪船といふのがあつて、之には飛行機のプロペラのやうな設備もあつた。これはアメリカのフルトンが今日の汽船を發明したのに先だつこと二三百年も前の事である。日露戰爭の時、日本海大海戰に於て空前の大勝を博した我が海軍の作戰は、實に能島流の兵法を用ひたもので、智謀一世に高かつた秋山眞之將軍が、當時聯合艦隊の參謀として東鄕提督に獻策されたものといはれる。

藤原純友が南豫の日振島を根據として內海西部の海賊に投じて亂を起した時、討伐の命を受けた小野好古は勅命を乞うて海賊戰に巧みな河野氏を味方とした。此の頃、新居郡の大島にゐた村上氏は海上の勇者であり、かねて河野氏の部將であつたから、三百餘隻を率ゐて難なく純友を討ち平げた。

其の後水軍は村上義弘公の代になつて、吉野朝廷の爲に最も忠勤を盡くしたものである。

室町時代になると伊豫の水軍はいよ〳〵勢力强大を加へて、終に支那・朝鮮の沿岸にまで進出した。彼の地では之を倭寇と呼んだ。彼等ははる〴〵貿易に出かけ、利益があれば引上げ、利益がなければ彼の地の奸民と共に亂暴を働いて、掠奪を恣にする樣な半商半賊的な行爲をした。併し彼等は決して鼠賊ではなかつた。旗鼓堂々時には百餘隻も引きつれ、万に上る多勢が悠々と乘り込んだこともあつた。

彼の地の書物に「毎隊相去ること一二里、海螺を吹きて號を爲す。聲を聞きて卽ち令して救援す。亦二三人一隊なる者あり、刀を舞して橫行す。人之を望み股慄して遠く避け、頸を延べ首を授く。」と書いてある。如何に彼の地の人々が怖れ戰いたか思ひやられる。かうした恐るべき倭寇が年々五六回も來たのではたまつたものではなかつたらう。

然るに、朝鮮の如きは殊にひどく荒されたと見えて、「其の區域數十里、肅然として人煙なし。」とまで記されてある。その昔、彼等が八幡大菩薩の大旗を押し立てて、大海を我が物顔に橫行濶歩した樣を想像しただけでも、意氣旺盛な海國日本の姿が髣髴するではないか。

嚴島の戰の時、能島の村上武慶は毛利氏に味方して、因島・來島の一族と共に、三百餘隻を率ゐて、防長の水軍五百餘隻と戰を交へたが、村上氏の進退は自在を極めて見事敵軍を打破り、遂に毛利氏の大勝に歸せしめた。

又豐臣秀吉朝鮮征伐の時、繰出した水軍九千餘人の中堅となつたのも實に伊豫の水軍であつた。卽ち南豫に居た藤堂高虎は二

千人、來島通之・通總兄弟は七百人を率ゐて進軍し、大いに武名を輝かしたのである。

伊豫の水軍の歷史を思ふ時、吾々は言ひ知れぬ痛快味を覺える。嗚呼伊豫水軍の血を承くる者誰ぞ、當今の靑年は祖先の魂を發揮して海國日本の爲に大に雄飛せねばならぬと思ふ。

古の海賊島の夜の灯を遠く眺めてなつかしみ居り。

一三 村上義弘公

吉井勇

今治港の沖合近く見る大島の山々の中で、威容群を拔く亀老山こそ、吉野朝の忠臣村上義弘公の英魂とこしへに眠る靈場である。その北麓の高龍寺は公の菩提寺であつて、本堂に安置せられた位牌を拜するに、

仁德院殿前金吾判官義體宗弘大居士

と記されてゐる。こゝから亀老山に向つて三丁ばかり登ると、公の墓所に詣でることが出來る。

公は新居郡の大島に城を構へてゐた頃から既に武勇の聞えが高かつたが、亀老山に移つてからは益々勢力を增して遂に因島・來島等にも城塞を持つやうになつた。これらの島は瀬戸内海航路の要衝を占めて居たので、公の勢力は頗る强大を加へ、威望は廣く海内に轟くに至つた。

村上義弘公之墓

元弘二年畏くも　後醍醐天皇隱岐の島に遷され給ふや、護良親王は吉野にあつて幕府の四大中心たる鎌倉と六波羅・長門・鎭西の各探題討伐の計畫を立てられ、諸國に令旨を下して勤王の軍を募られた。

公は河野氏の一族土居・得能の諸氏と共に、勇躍召に應じて義兵を擧げたが、これと前後して諸國の官軍も亦相次いで奮ひ起つた。

形勢容易ならずと見た長門探題北條時直は、六波羅の急を救はんと援軍を率ゐて京都に向つた。公は時こそ來つれと部下の水軍を指揮して備後沖に逆へ撃ち、遂に之を散々に打破つた。そこで時直は轉じて伊豫の官軍の本據を衝かうと道後の星の岡に迫つた。然るに土居・得能兩氏が協力してこれを粉碎したから、時直は辛うじて身を以て遁れた。

間もなく公は家子郎黨を引具して遙かに京都に上り、數度に亘つて六波羅攻撃に力めた。中でも久我畷の戰は最も激しく、終に賊將名越高家をして陣歿せしめたが、公も亦子息並に多くの郎黨を失うた。大塔の宮から「不便の次第云々」との感狀を賜はつたのは武人として此の上もない名譽とは云ひながら、武運拙く討死した子息や士卒の上を思ふ公の心中は果してどんなであつただらう。

さて、北條氏が滅んで建武の中興を喜んだのも束の間、足利尊氏の謀叛によつて世は再び戰亂の巷となつた。

延元元年、皇子懷良親王は征西將軍として九州に向はせられたが、その途次伊豫の中島なる忽那氏のもとに滯在さるゝこと數年に及んだ。其の間、公は征西の宮の送迎擁護の大任を果し、更に伊豫の國府を中心として、近くは忽那氏や中國官軍の諸將、遠くは九州の菊池氏と呼應して官軍の興隆につとめた。

征西の宮の九州に渡らせらるゝや、公は世田城主大館氏明公等と共に畫策大いに力め、刑部卿脇屋義助公を南海の總督として國分城に迎へた。當時讃岐には細川一族、中國には赤松氏等が蟠踞してゐたから、吉野と伊豫・九州の連絡は、一に公によつて制海權を確保されてゐた瀬戸内海によるの外はなかつた。だから刑部卿が事なく今張の浦に着かれたのも公の勳に負ふ所が甚だ多かつたのである。

又、後村上天皇の正平年間、高縄城主河野通堯が同類細川頼之と不和攻爭するに方り、公は大いに通堯を説いて遂に官軍に歸順せしめた。然るに間もなく四國の形勢が險惡になつたので、公は通堯と共に義軍を率ゐて官軍の陣容を整へ、王事に盡瘁したのである。

公は多年軍旅の中にあつて一品流と稱する戰法を創案し、非凡な戰術家であることを示されたが又、戰歿將士の冥福を祈るために因島に長福寺を建立せられた。公の如きは實に智勇兼備の名將と言ふべきである。

義弘公の事績は數へ盡くせぬ程であるが、これらは皆大義名分の上に立つた公の至誠純忠の發露である。宜なるかな、大正八年朝廷遙かに公の忠勤を追褒して正五位を贈らせられた事は。公の英靈も聖恩の有難さに感泣せられたことであらう。憶ふに、當時公に隨つて忠勤を抽んでた將士は悉く我々伊豫人の祖先であつて、我々はかゝる忠臣の血汐を承繼いでこゝに生を享けてゐるのである。公の精靈長へに鎭まる龜老山の姿を仰ぐ時、無言の教訓が滾々と湧き來つて感慨に堪へないのである。

一四 國分寺と脇屋義助公

本縣における多くの史蹟の中、史蹟保存法によつて國家から特に史蹟として指定されてゐるものは、櫻井町の國分寺の塔礎が唯一つあるだけである。

國分寺は奈良時代聖武天皇の勅願によつて全國に建立され、國家の安泰と國民の幸福とを祈らせられたもので、正しくは金光明四天王護國之寺といふのであるが、國毎に建てられた所から國分寺と呼ばれるやうになつたのである。その頃の佛寺は單に佛教ばかりでなく、その關係する所が大層廣くて、學藝・政治・醫藥の事から、拓殖土木にまで渉つて、實に地方文化の中心をなすものであつた。國府が國分寺の附近に設けられたのも全くこの爲である。

當時の定によれば、國分寺には二十僧が置かれ、封五十戸・水田十町を賜はつて居た。伽藍は方六間、七重の塔を中央にして、金堂・講堂その他の諸坊が前後左右に整然と建ち並んで居たものであるが、

今は唯塔礎が殘つて居るばかり、けれどもその巨大な礎石や附近から發掘される古瓦等によつて、如何に規模が大きくてしかも壯麗を極めて居たかが知れる。後世境内の一部と思はれる丘の上に本堂や庫裏を建てて法燈をついだのが現在の國分寺で、今は眞言宗に屬し、四國五十九番の札所になつて居る。ここには吉野時代頃からの古文書を多く藏し、學界から貴重な史料と見做されて居る。又國分寺と同時に法華滅罪之寺といふ尼寺も建てられた。今櫻井町にある法華寺

國分寺礎石

はその名殘である。

國分寺から程近い唐子山の麓には、忠臣脇屋義助公の墳墓がある。公は新田義貞公の弟で、義兵を擧げた初から鎌倉攻、或は湊川の合戰・金崎の戰等に至るまで、常に兄に從つて王事に盡くし、東奔西走その席煖まる暇もなかつた。

脇屋義助公墓碑

義貞公の戰歿後は、責務一層重きを加へて引續き各地に轉戰されたが、戰利あらずして吉野に歸還された。偶ゝ伊豫の官軍から統率者を請うたので公が下向されることになり、海陸の難を避けながら漸く今張の浦に着かれた。公は直ちに國分寺に入つて大いに劃策をめぐらされたが、幾許もな

く病魔の犯すところとなり恨を呑んで逝去せられた。これ實に後村上天皇の興國元年五月の事である。邦家のため誠に痛惜に堪へない。讃岐の細川勢はこの隙に乘じて來り攻めたので、世田城も陷り、城主大館氏明公も戰死せられた。

義助公は明治の御代に至り從三位を贈られ、義貞公と共に越前の藤島神社に合祀せられたが、唐子山麓の墓所にはさゝやかな廟があるのみで、側に次のやうな貝原益軒の賛が刻まれて居る。

擧兵廟筭　仗義速驅。　桓桓雄武　可起儒夫。
戰功籍甚　名與兄倶。　病歿南海　時乎命乎。

唐子山から國分寺のあたりに杖を曳くと、様々な古い歴史が繰展げられて、低回久しく去ることの出來ない思がするのである。

一五　大山祇神社

　今治港を出る發動船で、瀬戸内海の島々の間を縫ひながら、行くこと一時間餘りで大三島の宮浦港に着く。此の地は大日本總鎭守大山祇大明神の鎭座ましますところである。

　神社は境内の廣さ十餘町歩に及び、社殿は數百千年の大楠・大杉等が鬱蒼として日光をさへぎり、見るからに神々しい林叢の中にある。この神社は今から千二百年前に創建せられたが、その後種々なる變遷があつて、後龜山天皇の御代、今の本殿以下の立派な殿舍が造營され、明治三十七年に社殿と神門が國寶建造物に指定されたのである。

　祭神大山祇命は、皇孫瓊々杵尊の妃木花開耶姫命の御父君であつて、昔から皇室の御尊崇厚く、皇族の方々の御參拜が度々あつた。大正九年十一月十七日、今上陛下が東宮にましました時、行啓御參拜の上畏くも本殿の北側へ月桂樹を御手植遊ばされたが、枝葉

年と共にいよ〳〵繁茂しつつあることはまことに尊い極みである。更に昭和十年八月七日、澄宮殿下が我が市に行啓の途次御參拜遊ばされたことは、まだ記憶に新らしいことである。又古來武人達が軍の神として武運の長久を祈り、國家の安泰を願つたことは、奉納された幾多の武器を見ても明らかであるが、その中には護良親王をはじめ平重盛・大森彦七の太刀や、源義經の鎧などがある。その他國寶の指定を受けてゐるものだけでも百十餘點の多きに達し、甲冑に於ては實に全國國寶の七割を占めてゐるのである。これ等は昭和三年に建造さ

大山祇神社本殿

れた寶物館内に陳列して一般の拜觀を許されてゐるが、これこそ我が國第一の甲冑寶物館と言つても決して過言ではない。

昔、弘安四年の蒙古襲來の時、河野通有は本社に參詣して祈願を籠め、筑前博多に向つたのに、不思議や、神の使「白鷺」の案内があつて、遂に大捷を博したことは有名な話である。また白河天皇の御代久しく降雨がなく、百姓は苗代が作れぬので諸方の神々に祈つたが何の甲斐もなかつた。そこで能因法師は

　天の川苗代水にせき下せ
　　あまくだります神ならば神

の一首を詠んで雨乞をしたところ、果然神感があつて三日三晩大雨が降つたと云はれてゐる。

其の他武人や航海者が、武の神・山の神・海の神として靈驗を受けたことは枚擧に暇がないほどである。

春と秋の例祭には、附近の村々は申すに及ばず各地より多數の參詣者がある。この日、宮浦の港は船で一杯になり、乘降の客は引きも切らず、沿道や社前の廣場は、さながら人の海を呈する。

大山祇神社は伊豫の一の宮で、明治四年に國幣大社に列せられ、全國の人々の崇敬を集めて、永久に國家を鎭め給ふのである。

市内別宮の大山祇神社は奈良朝に大三島から勸請したもので、別宮の地名はこゝから起つたといふことである。

一六　鯛網

（一）

五月の第一日曜に鯛網見物に出掛けた。

隼丸はまだあか〳〵とついた埠頭の灯に號笛の響を殘してしづ〳〵と今治港の棧橋を離れた。燧灘を鎖す夜の帷はほの〴〵と曉の色に染められて、明けゆく島々は霞の衣の中に靜かな朝の姿を橫たへ、沖の方には夢の樣な帆影が動くともなく浮んでゐる。甲板に立つてじつとあたりの景色を眺めてゐると、いつしか四阪島が眼前に迫つて、熔鑛爐の大煙突からむく〳〵と湧き立つ白い煙は、すつかり明けはなれた海の上に鮮かな影を落してゐる。太陽はにこ〳〵しながら眞靑な五月の海を照らし、快い風はおだやかな波のうねりを渡つて來ては吹き過ぎる。

隼丸は油を流したやうな潮を分けながら一路目ざす吉田磯へと進んで行く。船室に入つて澁茶を啜つてゐると、友の一人が得意な鯛の研究一くさりを披露に及ぶ。大要はかうであつた。

「眞鯛は日本の沿岸到る處に居るが、漁獲高は南海になるに連れて多い、そして味は、古來瀨戸內海に產するものが第一だとされてゐる。眞鯛は近海魚で三十米乃至百五十米の海中に棲息し、平素は其の中層を游泳してゐるが、陽春の頃になると產卵の爲に沿海近く回游して來る。鯛網はこの時を見計つて下ろすのであるが、今治附近では吉田磯・バンダイ磯などが有名な漁場となつてゐる。古くから能地浦の浮鯛といはれてゐるのは眞鯛の群が來島水道を通過する際に潮流の爲に飜弄されて壓力の强い深みから俄に淺い海面に押出される爲鰾の中の瓦斯が膨脹して腹を上に浮き上るのである。」

私は友の話を聞きながら今訪れようとする鯛網の光景を樣々と想像に描いて好奇の念に胸をわく〳〵させた。

午前八時魚島を過ぎて江の島に向ふ頃、海上遙か薄靄の中に船影が三々五々見えて何處からか幽かな船唄が流れて來た。

沖の鷗に潮時間へば、わたしや立つ鳥波にきけ。

昔懐しい舟唄に合はせて櫓の軋る音がぎいつ〳〵と聞える。

隼丸は航行三時間にして今治を去ること三十五粁の江の島に着いた。浦を見渡すと漁船・遊覧船・仲買船の幾十艘が赤・白・黄・青と色とり〳〵の旗を飜して集つてゐる。岩角稜々築山の様な島の一角に、枝振り面白い老松があつて、其の下に小さな祠がある。蛭子様らしい。塵一つ留めぬ清められた神前には、今日の大漁を祈る二尾の鯛が、清酒と共に供へられてある。この浦の前方が鯛網の漁場吉田磯である。

二粁程も沖に大きな二艘の漁船が身動きもしないで眠つてゐる。それが鯛縛網の本船で今眞網と逆網で待機してゐるのだとのこと。陸と此の本船との中間に陣取つてゐるのが總司令船で沖合といひ、それからずつと離れてかづら船が二艘、小取が一艘、そ

鯛網（一）

れに曳船を合せて七艘が鯛網船の一組である。

（二）

やがて干潮のころみを期して沖合から合圖が始まると、それに和して小取・かづら・本船の物見台から一齊に手信號の開始だ。すると七十人ばかりの漁夫はさつと立上つて素早く各々の部署につき、面梶取梶たゞ沖合一人の合圖によつて動いて行く。本船の八挺櫓がぎいつと鳴る。「ほつしんよう〳〵。」掛聲勇ましく二艘の本船は左右に分れる。延長

四杆に及ぶといふ大網の山は船の進行に連れて崩れ、海面に大圓を描いて消えて行く。船と船との間には、それに和して忙しく信號が動く。大網の圓が一際大きく畫がかれて眞網・逆網が出會ふと、どの船からも、

からつ、〳〵、〳〵、〳〵。

と板を敲く音が盛に聞えて來る。それに合せてどの船も皆一樣に

からつ、〳〵、〳〵、〳〵

と舷を敲く。網を驚かして浮び上らせるのだ。はては大小數知れぬ石や木片をしきりに投込む。かうして網の中へ入れた鯛は一尾も漏らすまいと努める。

喧しいこれ等の物音がはたと止むと、

よういせ、〳〵、はりわのよういせ。

鯛網（二）

と呼ばはりながら一列横隊に並んだ漁夫の右手が出る。左肩が引かれる。腰蓑が左右にさらり〳〵と動く。さしもの大網も次第々に狹められて網を操る漁夫の手は段々早くなる。

やつせの、〳〵、〳〵、〳〵。

忙しい掛聲に變ると彼等は全く夢中である。遊覽船は一齊に近寄つて網を取卷く。取卷かれた網はこの間も絶えずやつせの〳〵と繰上げられて行く。網の目に驚いた大鯛が、さつと水面を走る。びちびちと水を切つて網

の上に躍り出す。其處此處に甲高い喚聲が湧く。大漁だといふ豫感が頭にちかつと閃く。漸く狹められた網の中に三十、五十、百、二百、果ては無數の金鱗の跳躍亂舞。これを見ても潑剌そのものゝ櫻鯛である。網の底の揚げられる頃には幾千尾居るかも知れない。漁夫も觀衆も一度にどつと歡聲を揚げる。絢爛豪華言語に絶する鯛網掉尾の情景である。

軈て漁船は大漁旗を押立て凱歌を奏しながら引揚げて行く。陶然としてゐた觀衆も始めて我に歸り、思ひ〳〵にエンヂンの音勇しく散つて行く。

折から落日海に流れて海上の船悉く金光を放ち、壯嚴の極名狀することが出來ない。

我等も買取つた鯛を土産に、幸多かりし今日の一日を語らひながら歸途についた。

一七 海水浴

夏は海、海は招く。

梅雨晴れの太陽がきらきらと町の甍に照り映え、野路の茨に白い花の咲初める頃から我が市の海邊一帶ははなやかに賑はひ、天保山・淺川の二大海水浴場はさながら夏の樂園となるのである。白砂青松水亦清く、遠淺に惠まれ燧洋の眺を一眸の裡にあつめ得た風景はまた格別である。近年設備の整ふと共に頓に人出を加へて、盛の日には實に數千を以て數ふるの盛況である。

（一）

輝く太陽、海は青し。すがすがしい涼味戀しさに、今日もまた燒きつけるやうな熱砂を踏んで、海へ海へと魅せられてゆく。空飛

ぶ鴎、浮べる帆船、渚に寄する小波もいとなごやかに、潮は上潮、今しいよいよ滿ちて來る。　高い櫓から見事なダイヴィングに人を驚かす者、クロール・神傳流の鮮さを誇る者、浮きに縋つて打興ずる者、げに海は人の子の樂園である。

エンヂンの音を殘して小艇が滑走してゆく。　岬の方には三つ二つ漁船の影が見えて、亦今日も入道雲が浮んでゐる。

（二）

けふも水泳うれしいよ　青いお海でドンブラコ
かもめも一しよにあそびます
するするヨットがすべります
今日も水泳たのしいよ　白いお砂へ池ほつて
みよちやんも一しよにあそびませう
すいすいトンボがとんでます

一八　四阪島

青い松に白い砂が眞夏の太陽に輝く天保山は、夏の樂天地である。右手に遠く別子の山々が連り、左手に近く近見の連山が海に迫つた大彎弓は、小島・馬島・仲渡・大島・四阪・比岐・平市等大小幾多の島々を抱き、紺碧の海に鴎ををごらせる。　水泳着の身輕な人々は遠

くに續く濱邊一ぱいにざわめいて、互に暑さを忘れて午後の半日を樂しんでゐる。

「叔父さん、此處の眺めは鎌倉あたりの海岸以上ですね。」

「そんなかね。」

「あちらにはこんなに澤山の島は見えませんよ。」

「うむ、然し江の島はよいだらう。」

「さう、江の島がぽつかりと浮んでゐる姿はよいですね。　それに、右手の方に富士山が見える時はほんとに何とも言へません。」

「富士はどこから見てもよいからねえ。」

「しかし、鎌倉の海は波がありますが、それに比べると此方の海は何だか靜かすぎて湖の樣な氣がしますね。」

「さあ、その波の穩かな所と、島の多い所が瀨戸内海の特長だらう。いつも見慣れてゐる叔父さん達には別に深くは感じないがね。」

「おや、あそこの白帆の向ふに白い煙を吐いてゐる島がありますね、高い煙突から。」

「うむ、あれが四阪島だよ。」

「あゝ、あの製錬所のある……。」

「さうだ。」

「隨分遠いですね。」

「まあ十海里かね。　こゝからは一つに見えて、一寸變つた船の樣な恰好だが實際は島が三つあるのだよ。　尤も以前は四つだつたがね。」

「一つはどうしたのですか。」

「あの高い煙突のある島と、その後に續いてゐる高い島との間を埋立てて一つにしたのだ。　それが四阪島の本島で、人家も大方はそこにあるのだ。」

「大勢人がゐるのですか。」

「あんなに小さく見えても三千人からゐるのだ。だから學校もあれば郵便局もある。狹い土地をそれは上手に利用して人家が雛壇のやうに並んでゐる。」

「何時頃からあの島で製錬を始めたのですか。」

「日露戰爭當時で確か明治三十八年の一月だつたと聞いてゐる。然し、現在の樣な大きな規模に擴張したのは大正十年頃のことだ。」

「あそこで製錬されるのは銅だけですか。」

「別子で採れる銅鑛の中には金も銀も含まれてはゐるが、あそこでは銅の製錬が主だね。」

「一日にどれ位とれるのですか。」

「それは一寸言ひにくいね、時によつて値段に高下があり、産額に

も多少の增減があるから。叔父さんが勤めてゐた頃には——一昨年の事だが——一日の産額が銅は三万五千圓、金と銀が合せて五千圓位のものであつたが……。」

「そんなに澤山採れるのですか。」

「さうだ。何しろ別子は日本屈指の銅山だらう。その銅山の鑛石全部があの島で製錬されるのだ。だからあそこには晝夜、間斷なしに大熔鑛爐が三千度からの高溫度に焚き續けられてゐるよ。」

「夜もですか。」

「夜もだ。製錬所創立以來三十年間、殆ど熔鑛爐の火を落したことがないといふことだ。夜更けて見ると、爐の中で熔けたゞれた銅の液體が一種異樣な光を放つて、それは物凄いよ。職工は流石に慣れたもので悠々とそれを汲取つて型の中に流してゐ

るが一寸溢れてもひらつと火花が立つ。　誤つて爐の中にでも落ち込まうものなら人間一人位はぺろつとなめて、白い煙がそつと立つだけのことだ。」

「何だか恐ろしいですね。」

「しかし、四阪島の生活には他所で味はへないよいところがあるよ。　夏は廣い海面を渡つて毎日の涼風はそよぐし、いつも島全體が一心一家の親しみを深めて毎日の生活に緊張する、何とも云へない幸福な島だよ。　殊に夜になると電燈が島一ぱいに輝いて光の王宮とでも云ひたい美しさだ。　あの島へは新居濱から海底電纜によつて強い電力が送られてゐるが四阪島・新居濱間六萬八千呎の海底電纜は敷設當時世界で一番長いものだと云はれてゐた。　その電力が闇黑の海に寶珠の山が浮ぶかと思はれる様な電燈となつて輝いたり、工場內の無數の機械を絶間なく運轉させたりしてゐるのだ。　夜も機械が働くとすれば人間も働かないではゐられない。　それであの白い煙の立つてゐる所には眞夜中でも大勢の人が働いてゐるのだ。」

「素晴らしいですね。」

「……………」

「あの煙はなぜ白いのですか。」

「あれは亞硫酸瓦斯を含んでゐるからだ。　亞硫酸瓦斯は有毒だから、島の人々にその毒の及ばぬ樣にと、あの煙突は七十米もの高さに作つてある。　併し最近あの煙の中から亞

四阪島

硫酸瓦斯を抽出して硫酸を製造する試驗を行つてゐると云ふことだから、やがてはあの煙も無駄には捨てない時が來るだらう。」

「あの煙が硫酸になるといふのですか。」

「さうだ、面白いではないか。研究に研究を重ねて行くと、今までお互に知らなかつたところに貴いものゝ在ることが知れるのだ。かうして祕密の寶庫は人間の研究によつて段々開かれて行く。太古から幾百千年、四阪島は無人島としてあそこに横たはつてゐた譯だが、それが製錬所が置かれてからは、あのやうに煙の上がる尊い島と變つたのだ。」

「お話を聞いて、何だか行つて見たくなりました。」

「よし、百聞は一見に如かずだ。鎌倉に歸るまでに一度實地見學に出かけるとしよう。」

「…………………」

「さあ、又一泳ぎしようかね。」

砂の上に腰を下ろして睦じげに話してゐた二人は、やがて又靜かな海へと泳ぎ出した。遙か四阪島の煙は、陽光をうけて銀白色にたなびいてゐる。沖には白帆が點在して、曳船の影も小さく見える。天保山の眞夏の午後は、遲々として、悠々として移つて行く。

一九　石鎚山

（一）

朝夕伊豫の高根と仰ぐ石鎚山に今日こそ登るのだと、友人と共に今治驛を發つた。

蒼社川の鐵橋を越えると、綠濃い唐子・笠松・佐禮・奈良原の山々に

割られた河南の平野が、車窓の外に展開される。遙か南の方には別子・瓶ケ森の諸峯が波濤の如く連つてゐる中に、四國アルプスの主峯石鎚の雄姿が現はれる。稜々たる山容、東牛富士に似て富士より嶮しく、巍々として雲際に聳ゆる樣誠に天地間の偉觀である。

トンネルを通過した汽車は周桑平野を眞一文字に進んで、石鎚驛に着いた。此處で車をすてゝ目ざすお山の頂上まで三十五粁の徒歩登攀の草鞋を踏みしめる。

石門の邊からは氣持よく晴れた

石鎚山遠望

午後の日を浴びながら、いよいよ山徑をたどる。誰も皆白い着物に白脚絆、金剛杖に後鉢卷といふ行者姿である。行逢ふ者はお互に「お上りさんで、」「お下りさんで、」と親しい言葉を取交はす。加茂川の流は溯るにつれて急となり、山路は攀づるにつれて險しく、谷は益々深まつて來る。山角を廻ると不意に大きな巖が行手を遮ぎつて、道窮るかとすれば僅かに開け、碧潭に臨むかと思へば頓に密林の闇に入る。峯を仰いで靈氣を感じ、谷に俯して溪流を聽き、山路の興味歩に隨つて湧く。

成就社の近くは溪流の響遠く、松杉等の樹蔭空を被うて四顧只深緑、遙に俗塵を離れた心地がする。

（二）

いよ〳〵成就社に到着した。石土彦を祀る石鎚神社に額づく。社前に二抱へにも餘る杉の老木が聳えて、樹幹に注連繩を張り、登

山四十幾回記念など云ふ木札が掲げてある。毎年數万人の登山者の誰もが仰ぐ神木である。境内の片ほとりに二棟の宿舍がある。

長い夏の日もいつしか暮れかけて、彼方今治の邊は夕靄の中にかくれ、西條の町の灯が星の様にまたゝいてゐる。麓から次第に暮れてお山が宵闇の中に眠る頃になると、八月といふに冷氣が身に泌みる。どうやら霧が流れてゐるらしい。一同は宿のランプの許で主人からお山開きの賑ひを聞いた。六月の初め全國各地から、時には外國人をも交へて毎日數千の登山者があるといふ。お山があけて十日間、山は大變な賑ひで、一行の多くはこゝに一宿する。草鞋のまゝで板間に臥する者、一枚の筵に數人が坐してゐる者、立木に倚掛つて一夜を過す者、菅笠に夜露を凌いで翌朝登山の先驅けをしようとする者など、その宿泊は如何にも簡單そのも

のである。我々も早起を約して寢に就いた。

萬籟絶えたる山の宿、仮寢の夢もまだ半ばの午前二時といふに起きて外に出る。冷氣漲る中空に老杉亭々として聳え、殘月が梢に近く落ちかゝつてゐる。白衣の一行は足場を探りながら遠く續く四粁の難路に發足する。幾萬人に踏みならされた樹の根巖角がまろやかに摩れて、薄闇の中にほのかに光つて見える。森を通り谷を過ぎて峯傳ひに進めば白み初めた東の空には疲れたやうな星影が瞬いてゐる。

一峯々々次第に明け離れると、まだ曉霧に沈んでゐる谷々から名も知らぬ小鳥の聲が聞えて來る。いつしか風につれた白雲が間近に渦巻き變幻自在に樹林をつゝむ邊を抜けると、不意に巖壁が屹立して二條の鎖が直下してゐる。これぞ名におふ石鎚のお

鎖の場である。傍には古草鞋が山のやうに捨てられてある。我々も新しいのと履替へて、六根清淨の聲勇しく鎖を繰つて攀ぢ登る。一の鎖、二の鎖を過ぎて間もなく三の鎖にさしかゝる。山頂を眞上に仰いで全長七十五尋、雲霧の去來する中に鐵の鎖が重々しい。お鎖の場としてはこゝが最も險阻なものであり、又最後のものである。登攀半ばそつと振返れば谷に臨んだ斷崖絶壁、膚も粟立つ怖しさ、只懸命に鎖を握る。

石鎚山

（三）

鎖を終へて頂上に立てば、雄大なる展望豁然として眼下に開く。群山を壓して海拔二千餘米、土佐灣も瀬戸內海も指顧の裡に在り、壯絶快絶、眞に天下の大觀である。巖上石造の小祠には石土の神を祀る。四邊を見れば巨巖怪石の組合つた中に珍らしい高山植物が簇生して、可憐な花を咲かせてゐる。

巖頭に佇んで天地を俯仰すれば、黎明の天に斷雲がしきりに浮動してゐる。忽ち一團の密雲風に乘つて西より來ると見る間に、次第に近づき次第に擴がつて遂に全山を埋め盡し、眼界模糊として身はたゞ漫々たる雲海に閉ざされる。

暫くして雲塊は霞と分れ、霧と流れて眼界漸く明朗。森林が現れ幽谷も見えて、峯と呼び溪と指すうちに、怪雲再び襲ひ來り、諸峯を奪つて僅かに天狗嶽の頂を殘す。さても目まぐるしい雲霧の動亂、集るかと思へば飛散し、散るかと思へば凝集し、塊と卷き層と

開き、濃くなり淡くなり、刻々の變化は全く人の魂を消す。

かゝる一瞬、東天の飛雲燦として旭光に輝く。すは御來迎と一齊に禮拜する。おゝ今し神代ながらの日輪の昇天、何たる崇高、何たる莊嚴。たゞなはる連山雲影と共に一齊にあかねさすよと見る間に、或は眞紅に淡紅に、或は紫紺に碧藍に、さては黃となり綠となり、千色萬樣見る〳〵移る光彩の絢爛、優美と言はうか壯麗と言はうか、正に頂上第一の饗宴である。

頂上の南側に覗の行場がある。友人に助けられて獅子頭の如く突出た巖に腹這ひ、巖下をさし覗く。斷崖深さ幾百仭、愕然として目も眩むばかり、役の行者の藥師如來を安置する邊は一抹の白雲が搖曳してゐる。漏斗狀の急斜面をなして深く落込んだ、大溪谷は地肌悉く熊笹に被はれて朝露が陽光に輝き、全く鮮綠の天鵞絨張である。綠面の處々にはうら枯れた樅の白骨林が續いて石鎚特有の美しい景觀を呈し、時に白雲が舞ひ下つてさながら無縫の天衣となる。

あゝ靈峯石鎚は確に山の王者であり、伊豫の秘寶である。朝夕に仰いで無限の默示を受けた我々は、こゝに莊嚴極りなき山上に立つて靈氣に浴し俗塵を脫し、宏大なる天地を觀じ、永遠の我を憶ふ。かくして四顧展望に快をつくした一行は盡きぬ名殘を惜しみつゝ下山した。

あまた度かへり見しつゝ雲かゝる伊豫の高嶺を思ひこそやれ（半井梧庵）

二〇 半井梧菴

半井梧菴、姓は和氣、名は元美、後忠見と改む、梧菴は其の號なり。文化十年六月今治に生る。早く父兄を失ひ、少壯母を奉じて京都に遊び、荻野德興の門に入りて醫を修む。業成りて今治に歸る。其の術漢洋を折衷し、尤も治疫に長ず。嘉永二年藩醫菅周菴の始めて痘苗を傳ふるや、衆醫皆拒みしに、梧菴獨り群議を排して之を容る。又化學を講じ、藥園を創め、洋藥を製する等、斯道に貢獻するところ頗る多かりき。梧菴醫の傍ら國學を修め、殊に心を語學に用ひて足代弘訓・海野遊翁に學び、最も力を語格の研究に注げり。當時歌人として名ありし近藤芳樹、嘗て梅柳日記を著はし、携へ來りて語格を質す。梧菴乃ち一々指摘して返ししに、芳樹大いに其の說に服し、是より交情頗る密なりしと云ふ。皇典の學に至りては厚く本居宣長の說を信奉し、宣長を以て日本の一大聖人なりとせり。梧菴亦說をなして曰く、「我が邦は道統終古皇室に存す。

支那の如きは夙に天子を離れて儒家者流の手に墮つ。其の他の諸國を觀るに、亦均しく之を失へり。學者先づ此の大處を知らざるべからず。皇統の萬世一系なる、上下名分の嚴正なる、一に皆此の道統の全きに因るのみ。」と。

梧菴先生肖像

梧菴又力を和歌に致し、八代集の中より數千首を採錄し、名づけて歌格類選と云ふ。その他著書數多ある中に、愛媛面影五卷は尤も思を凝せるものにし

て、自ら山野を跋渉し、或は諸史に徴し、或は故老に質して大成せり。蓋し伊豫風土記の亡失せるを慨きて筆を執りしものなり。是より先、遠祖和氣清麿に神號の勅賜あるを聞き、感激して京に上り家系を奉りしに、特旨を以て法橋に叙せられぬ。時人以て異數となせり。明治元年今治藩學の助教となり、盛に古語拾遺、令義解等の國典を講ぜり。後石鎚神社の祠官に補せられ、累進して中教正に昇る。既にして年七十を超えたるを以て職を辭す。時に明治十七年なり。その後諸方を遊歴し、吟詠自ら娯しみしに、明治廿二年一月病んで京都に歿せり。壽七十七。洛東神樂岡に葬る。三子あり。元章・眞澄・榮と曰ふ。元章早く死し眞澄家を繼ぐ。嘗て別格官幣社護王神社宮司たり。眞澄の子鐵道、今京都に在りて醫を業とす。

梧菴性剛直にして邪曲を許さず。然れども孝友の情誠に篤か

りき。又書・漢學をも善くせり。著作中、歌格類選・花廼家苞・鄙の手振・愛媛面影・愛媛略史等は既に出版して世に行はる。尚未刊のもの多く、歌物語・文の栞・古事傳記略・玉鉾百首演義・月瀬紀行・遠西寫眞全書・梧菴歌集等あり。今、其の詠歌・詠詩の中數首を錄す。以て其の詞藻に豊かなりしことを知るに足らむ。

行路蟲　行けばあと留れば先に鈴蟲のふりすてがたき聲もするかな

松不改色　もみぢこそ花こそちらめ千歳經む松のみどりの春秋もなし

山新樹　山はみな青葉になりぬこれやこの彌生の頃の花の白雲

松上藤　藤浪のかゝらざりせばときはなる松には春もしられざらまし

初春海　つる鯛のいろにもしるしわたつみの千尋のそこも春は

　來にけり

落　花　賤の男が返す山田にちる花はまた來ん春の種や蒔くら
　ん

詠二殘菊一長歌並短歌

千年經む　種としきけば　足曳の　山路の菊を　內日刺す
都に植ゑて　おもふどち　花見てましを　もろともに　歌よま
ましを　とやせまし　かくやせましと　一日過ぎ　ふつか三日
すぎ　いたづらに　秋暮れはてて　露の間に　冬は來にけり　し
かすがに　老の名におふ　翁草　霜はおけども　いろのかはらぬ
もゝ草は霜枯れはてゝ籬にも猶かぐはしききくのひと本

二一　詩の國

氣候が穩かで山水の眺が麗しい伊豫の國は、流石に月を賞し花を愛でる文人に富んで、詩の國・歌の國と讃へられてゐる。伊豫をして眞の詩の國・歌の國たらしめた人は何といつても俳聖正岡子規であらう。

子規は松山に生れ、病氣勝ちの一生を俳句・和歌・文章の革新に捧げて、明治文學に不朽の偉業を遺したが、又その門下からは同郷の鳴雪・虛子・碧梧桐の如き俳句界の大家を輩出した。

春風に尾をひろげたる孔雀かな

小庇にかくれて月の見えざるを一目を見むとゐ
ざれど見えず　　正岡子規

貰ひ來る茶碗の中の金魚かな　　內藤鳴雪

門の子を母が呼ぶなる蚊喰鳥　　高濱虚子

門を出づれば學校休み日の銀杏そよぎゐる　　河東碧梧桐

わが今治には、まだ前記の大家に匹敵する程の文人は持つてゐないが、試みに徳川時代からの名ある俳人・歌人を調べてみると凡そ次の諸士を擧げることが出來る。

白壁はいやしと竹を植ゑにけり　　卯七

啼き入りて鶯聲を忘れけり　　別宮雅樂助

砂山や下萌見ゆる足のあと　　田頭半窓

碁の側に碁きらひの來て晝寢哉　　丹下逸翁

名にしおはゞ四方の田の面のうるふまで水せき

下せ瀧の御社　　町野政胤

注連縄の萬代かけて祈るなりわが日の本の國の榮えを　　半井梧菴

ひく駒に水飼ひがてら賤の男も柴をり敷いて花を見るかな　　田窪櫻戸

わが郷土を寫したり、郷土を詠んだりした作品に接するのは、よしや郷土の文人の手に成つたものでなくとも亦誠に懐しいものである。

伊豫の今治機屋の煙
機屋繁昌で町も富む

深い港に入船出船
　日毎夜毎に鳴る汽笛
町の名所はみすかの城よ
　南堀端水深い　　野口雨情

たゞひとり吹揚城のあとに來て雲雀聽きつゝものをこそ思へ

とどろとどろ來島の瀬戸の渦潮の高鳴る聽けば雄ごゝろのわく

大君の櫻咲きけりかしこみて千疋峠の花ををろがむ　　吉井勇

二三　交通

五時間目の授業の時先生は、

「今日は今治市の交通についてお話致しませう。」

とおつしやつて今治の大地圖を指差されました。そして

「我が今治市は、この瀬戸內海に突出する高繩半島の北端に位する一都市であります。この東に展開してゐる海は燧灘で、西に盡くる所は有名な來島海峽となつて更に洋々たる關前灘に連つてゐます。今治は昔から瀬戸內海に於ける水運交通上の一要地であり、又海陸要害の地であつたが、一朝東北の時化となれば町內は屡泥海と化するの慘狀を呈して、人々は非常に苦しんだものであります。」

とおつしやつて、やがて天保山といふ名稱の起源や、今治といふ地

名の由來等について色々とお話をして下さいました。

次に先生は、

「明治維新以後我が今治の產業が漸く勃興して、附近との取引だけでは滿足出來なくなり、遠く大阪にまで手を伸ばす者が出て來ました。けれども當時は押切船といつて僅かに舟子四人の船で、天候を窺ひ潮を待ち沿岸の港々を縫うて大阪に行き着くまでには幾日も幾日もかかつたものだといひます。其の後交通機關の發達につれてやがて今治の沖合にも小蒸汽船の往來を見るやうになりましたので、有志の人々は如何にもしてこの汽船を今治港へも寄せてもらはうと、八方奔走の結果、漸く一二隻の寄港を得るやうになりました。尤も寄港といつても今のやうに棧橋に橫づけになつたり、港近くに碇泊したりするのではありません。積荷のある時にそれを小舟に積んで遠く小浦

や波止濱邊に漕出して、小蒸汽船の通りかゝるのを待受けては旗や提灯で合圖をして、やつと積荷をして貰ふといふのです。しかし其の間も船は進行を止めないために、時には四阪島の邊までも引かれて行つたと申します。」

といつて當時の今治海運界の功勞者飯忠七氏の傳記や、沖合を小蒸汽船が通るといふので、黑船々々といつて澤山の人が辨當掛けで見に出かけたといふ事などを附け加へてお話しになりました。私達は今更ながら今昔の感に堪へませんでした。

先生は尙お話を進められました。

「その後時勢の進運に伴つて運輸も交通も頻繁になり、尾道港との連絡を始め大阪・神戶・關門其の他內海を航行する船舶の出入が漸く繁くなりました。けれども港は依然として時に波浪に蹂躪せらるゝ有樣でありましたので、港の修築如何は實に我が

今治の盛衰興亡を決する緊急問題となりました。そこで愛媛縣は明治四十二年に今治港を縣費補助港の一に加へ、大正二年築港基本調査に着手して同九年いよ〳〵起工、三年の日子を費してこゝに防波堤燈台等も出來上りましたが、更に國費の補助を得て十箇年計畫工費三百万圓を以て第二期擴張工事に着手しました。かくて最新の學理を應用した幾多の機械操作と幾百の從業者の努力を經て遂に昭和九年に竣工したのであります。之より先、大正十一年には既に開港場となつて商工業に一大改新を來し、海上の交通は實に目覺しくなつて來ました。旅客の昇降貨物の集散年を逐うて益々夥しく、島嶼部を始めとし宇品・尾道・大阪・九州・大連と各方面に航路を通じ、船舶常に輻輳して黑煙の遠く近く空に棚引くを見るやうになりました。今や御覽の通り、防波堤の延長約六百米、港內の面積凡そ二千數百アール、水深最大六米餘に及び、三基の棧橋を有して、大船巨舶を自由に繋留し得るやうになりました。けれども來島海峽は水路極めて狹隘、加ふるに暗礁多く、七ノット餘の潮流は常に荒渦を巻いて、古來こゝに難に遭ふもの枚擧に遑なく、航海者の最も苦しむ所であります。從つて我が今治港の發展にも尠からず障害を與へて居りましたが、幸に明治三十五年遞信省から大濱の燈台が建設せられました。この燈台は來島海峽の東口に位し、高さ十二米鐵造六角形の白色塗で光達距離十七浬に及び、紅綠の鮮光が交互に回轉してゐます。其の他龍神島・今治防波堤・來島・白石・鴻ノ瀨・桴等の燈台及び仲渡潮流信號所等の各所に燈光明滅して徹宵船舶の航海を助けてゐます。」

先生は尙燈台守の淋しい生活や航海者の勇ましい活動などについてお話しになりました。

それから更に、

「眼を轉じて陸上を見ると、街路樹の影も美しい大幹線道路廣小路線の開通を始めとして、新道路が縱横に通じ、市營の銀バス其の他車馬の往來が頻繁で交通は頗る殷盛を極めてをります。

顧みれば大正十三年の國鐵豫讃線の開通は、之まで海港を以て生命としてゐた今治の交通運輸上に一大變化を來しました。

爾來こゝに十數年、當市の交通狀態は次第に發達し、松山方面に高松方面に將又中國・九州・關西方面に交通は益々頻繁となりました。而して近く更に臨港鐵道の敷設をさへ加へんとするの有樣となりました。」

先生の聲はだん〳〵熱を帶びて來ました。

「我が今治市は斯の如く水陸交通の要所を占め、今や産業の振興と相俟つて、市勢は年と共に大發展を示してゐます。幸に生をこの地に享けた吾々は、相共に力を合せて大今治市建設の爲に一層努力しようではありませんか。」

先生は力強く叫ばれました。私どもは深い感銘に打たれて授業を終へました。

なるは渦卷く來島瀨戶よ、船のゆききは燧灘。
四方の景色は石鎚山の、山の高さも及ばない。
伊豫はよいとこ住みよい所、暮しやすくて日ものどか。

野口雨情

二三　織物

我が今治は日本有數の綿織物工業都市であつて、市勢現時の大

發展は實に斯業發達の賜といつても過言ではあるまい。

昭和九年末の調査によれば、織機五千六百余臺、從業職工男女合して四千名、綿織物生産額二千百萬圓に上り、更に紡績工業を加ふれば從業者五千六百名、生産額三千萬圓に達し、之を全市の諸生産總額三千五百余萬圓に比ぶれば、正にその八割七分を占めてゐる。以て織物工業が本市産業の生命であることが知られるであらう。

古來伊豫の國では廣く草棉を栽培し、之を紡ぎ手織機にかけて自家の需要を充してゐた。然るに今から凡そ二百年前柳瀨忠治氏は地方殖産興業のため各戸に於て白木綿を織らせ、これを纏めて大阪地方に賣出した。これが當地織物工業の起りである。其の後伊豫木綿の名によつて各地に賣出されるやうになり、更に藩の保護奬勵によつて漸次發達して、終に當地方有數の産物と

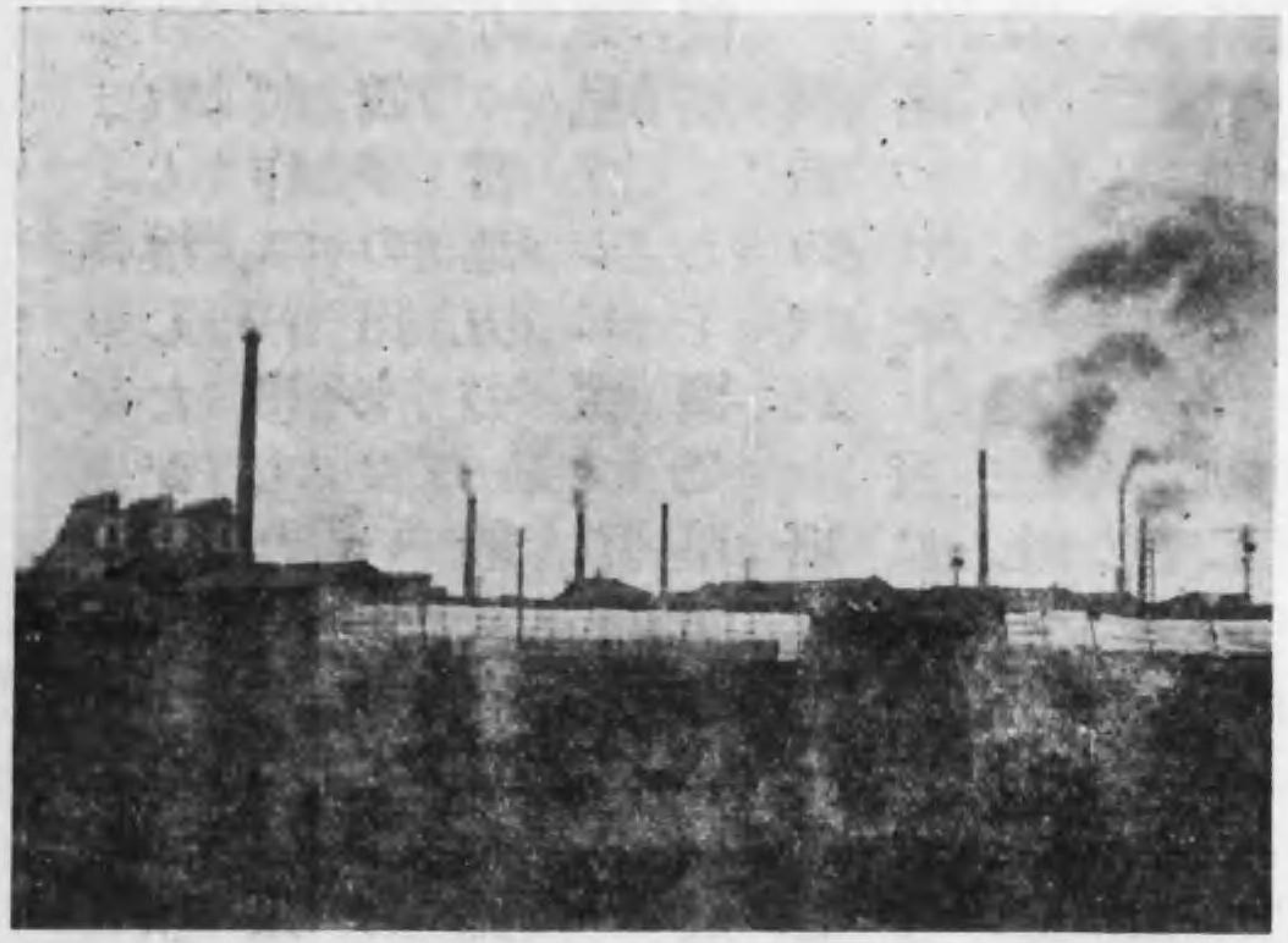
なるに至つた。

明治時代に入ると益々同業者の數も増したが、明治十五年頃から各地で紡績絲を使用し、優良品が製作され出した。その結果、品質に於ても價格に於ても到底之と競爭の出來ない伊豫木綿は、全く市場から驅逐せられるやうになり當地方の一般民家は木綿手織の內職を失つて、誠に悲慘の狀を呈するに至つた。

矢野七三郎氏は、この有樣を見、慨然として機業革新の意圖を抱き遠く和歌山縣に赴いて紀州ネル製造の狀況を研究し、後同志と相謀つて工場を設け之を興業舍と名づけた。實に明治十九年一月の事で我が今治の綿ネル工業はかくして誕生した。市內に林立する煙突と晝夜を分かぬ織機の響に現時の盛況を思ふ者は、吹揚台上に矢野氏の銅像を拜して斯業創始の偉勳に深い尊敬と感謝の念を捧げねばならないのである。

現在今治で生産されつゝある主なる織物は廣巾物に白ネル・縞ネル・白縞色三綾雜綿布等があり、特殊織物にタオルがある。此の中で白綾ネルは、片面に起毛した所に、紀州ネル及び西陣ネルには見られぬ特異性を持つた織物として、市場に喧傳されてゐる。

タオルは明治二十七年頃阿部平助氏によつて始めて製作せられた。氏は今治の織物の種類が少くて利益が薄いのと、線ネル製造によつて生ずる餘



今治の工場地帯遠望

絲色違等の利用に着目したのである。其の後麓常三郎氏の苦心研究によつて木綿機をタオル機に應用する方法が案出された。これがため從來村落にまで擴がつてゐた白木綿とネルの賃織工場は忽ちタオル工場に變つて異常な躍進を示し、今治は泉州の佐野、伊勢の津と共に我が國三大タオル産地の一に數へられるやうになつた。

今治の織物は生産額の四割を滿洲・支那・印度・南洋より遠く阿弗利加・南米等にまで輸出して殆ど全世界に行き渡らんとする盛況である。

思へば我が今治織物の歷史は古い。しかして地の利と人の和によつて一大織物工業都市となり、市民の生活は之によつて定まり、市勢膨張亦之によつて起り、織物今治の名は愈々高まつた。然し現狀を以て決して滿足すべきではない。日進月步の今日

一歩も世運に後れるやうなことがあつてはならない。幸に縣立染織試驗場、今治織物工業組合等の研究指導は斯業の改善發達に寄與するところ甚だ多く、一般機業家の自覺と相俟つて製品は一般に技術的工藝的ならんとし、又單に從來の綿織物のみに止まらず更に新規織物の製作にまで伸展しようとしてゐる。今治織物の將來は實に多幸であるが、それだけにいよ／＼研究と努力を怠つてはならぬ。

二十四　市制祝賀の歌

（大正十年十月）

一　機舍の煙は天を覆ひ　鐵機の響に地はゆるぐ
これぞ今治四萬の　市民の意氣ぞ雄叫ぞ

二　積荷の山に太陽はさして　マストの林に月は照る
これぞ我等が誇りなる　四國に一の開港場

三　見よや努力の報酬を　港は開かれ市制なる
あゝ幸多き今治市　あゝ盛なる今治市

四　されど千年の繁榮は　同胞四萬の肩にあり
いざ覺悟せん我が市民　いざ勵まなん我が市民

郷土年中行事

月	行事	日
四月	各學校入學式	
	神武天皇祭	三日
	結核豫防デー	廿七日
	天長節	廿九日
	灌佛會	
	花見	
	潮干狩	
五月	八十八夜	二日
	乳兒愛護デー	五日
	端午節句	
	氏神大祭	十日
	河野通信公命日	十九日
	海軍記念日	
	徴兵檢査	
	大掃除	
六月	齲齒豫防デー	四日
	時の記念日	十日
	入梅	
	和靈神社大祭	（舊廿三日）
	螢狩	
七月	田植	
	七夕祭	七日
	盂蘭盆會	十六日
	藪入	
	祇園祭	
	海水浴始まる	
	お山開き	
	暑中休暇	
八月	虫干	
	各所夏祭	
九月	關東震災記念日	一日
	二百十日	
	秋の彼岸	
	秋季皇靈祭	
	たのも	（舊八月一日）
	月見	
十月	戊申詔書御下賜記念日	十三日
	神嘗祭	十七日
	栗節句	
	惠比壽講	
	教育勅語御下賜記念日	三十日
	滿期兵除隊	
	茸狩	
十一月	明治節	三日
	體育デー	
	國民精神作興詔書御下賜記念日	十日
	七五三祝、銃獵解禁	十五日
	酉の市	
	新嘗祭	廿三日
	紅葉狩、菊見	

月	行事	日
十二月	針供養	八日
	義士會	十四日
	大正天皇祭	廿五日
	クリスマス	廿五日
	官衙御用納	廿八日
	大祓	卅日
	年こもり	卅一日
	餅搗、門松を立て、しめ繩をはる、	
一月	四方拜	一日
	新年回禮	
	惠方詣で	
	初夢	
	元始祭	三日
	官衙御用始	四日
	七種粥	七日
	寒稽古	
	とんど	十四日
	藪入	
	入營	
	寒入	
二月	舊正月	
	節分（豆まき）	
	紀元節	十一日
	祈年祭	十七日
	梅見	
三月	雛祭	
	地久節	六日
	陸軍記念日	十日
	春の彼岸	
	春季皇靈祭	廿一日
	各校卒業式進級式	
	中等學校入學考査	

（定價貳拾錢）

昭和十二年三月廿日印刷
昭和十二年三月卅日發行

編輯兼發行人 愛媛縣教育會今治部會代表 村上紋四郎

印刷人 愛媛縣松山市魚町二丁目九、十番地 福田ニロウ

印刷所 愛媛縣松山市魚町二丁目二八番地 福田合資會社

發行所 愛媛縣教育會今治部會

374
329

終